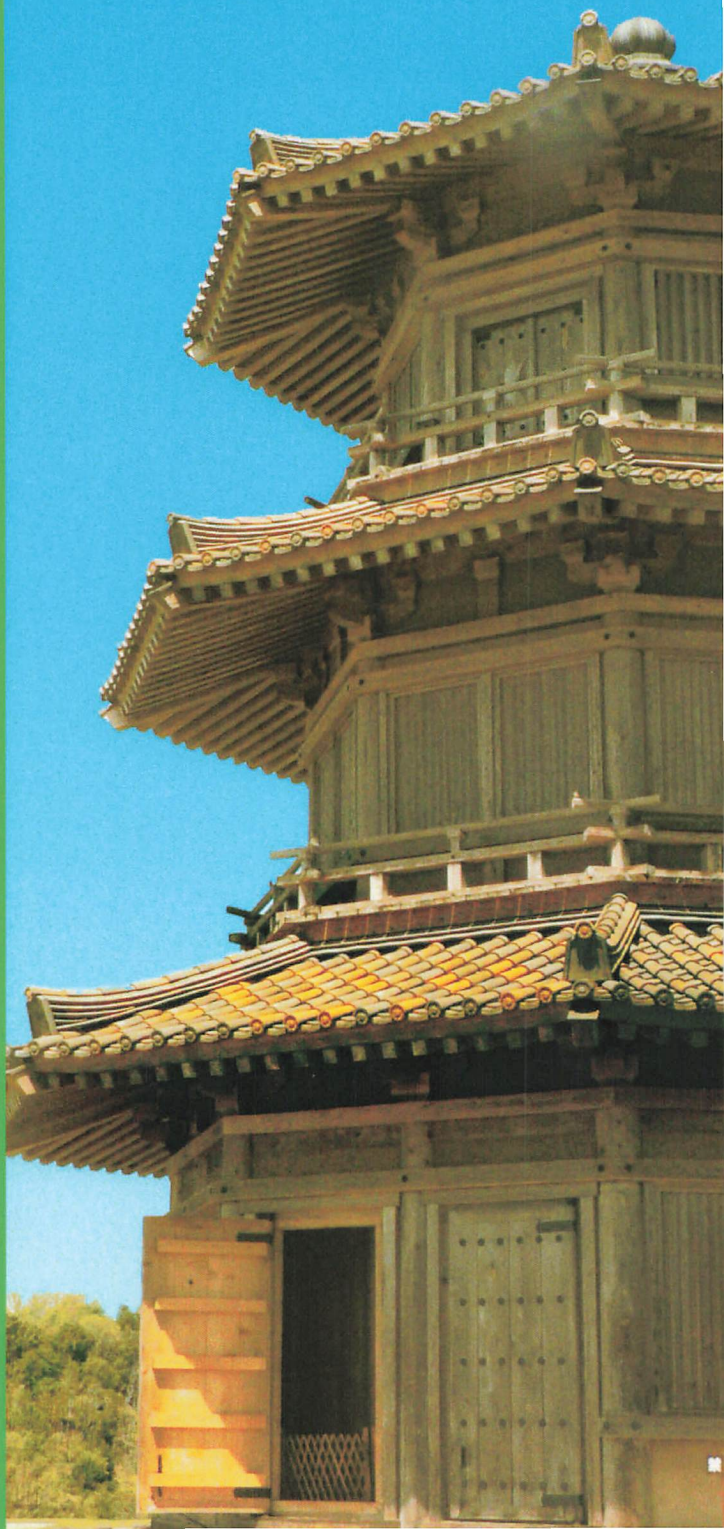


歷史公園鞠智城・温故創生館

館長講座 〔資料集〕



歷史公園鞠智城・温故創生館

館長講座
〔資料集〕

目次

平成19年度第8回館長講座『古代の官道』	講師 日野 尚志	1
平成20年度第2回館長講座『建築からみた鞠智城』	講師 小西龍三郎	33
平成20年度第5回館長講座『文献からみた古代山城』	講師 板楠 和子	67
平成21年度第1回館長講座『百済の仏像』	講師 大西 修也	101
平成21年度第4回館長講座『古代西日本の朝鮮式山城』	講師 小田富士雄	117
平成21年度第5回館長講座『文献からみた鞠智城』	講師 坂上 康俊	129

平成19年度第8回館長講座

(平成19年2月3日開催)

『古代の官道』

【対談】

日野

尚志〔佐賀大学名誉教授〕

大田

幸博〔熊本県立装飾古墳館館長〕

大田幸博

先程、日野先生のお話の中で、熊本県の宇土半島のある所に古代山城の可能性があるとおっしゃいました。この件につきましては、今年、合併して上天草市になった大矢野町に候補地があります。私が『大矢野町史』の編纂時に調査しました。場所は、宇土半島の三角町と天草上島の大矢野町が対峙する箇所です。小海峽には、天草五橋・一号橋の「天門橋」が架かっております。宇土半島から見て、その天門橋の対岸にある山を「ひだけ」と言います。漢字で表せば「飛岳」となります。旧大矢野町が作成した地形図には、「烽火跡」との書き込みもあります。伝承によれば、山頂が烽火場（のろしば）で、麓の一角には「防人（さきもり）がいた」と伝えられています。現在、採石場になっていきますから、山は、大半が壊されております。しかし、平成十年度までは、尾根筋に石罫が残っていました。採石場の社長さんも写真を撮っておられまして、私も実見しました。しかし私は、石罫はともかく、伝承については眉唾ものとして受け取りました。が、地元では良く知られた伝承でした。真偽の程は定かではありませんが「防人の任期が三年交代だったので、近くに三年ヶ浦（さねがうら）という地名が残っ

た」ということでした。

山腹は、大きく抉られています。山頂部分は、かろうじて残っております。復元しますと山の尾根筋は、古代山城に見合う様に馬蹄形（ばていけい）の格好をしています。先生は、このように、宇土半島や天草に古代山城をお考えなのです。飛岳も候補地の一つと思います。

日野尚志

そう考えております。ただし、飛岳のことは全然知りませんでした。ただ、可能性としては、そこも考えて良いのではないかと思えます。地理的には、恰好の場所に位置しています。

大田

今日のお話をうかがって、私は、とても興味深いものがございました。私たち、熊本県人は、九州の古代山城を考えると、あくまでも、大宰府を中心とする城塞の配置となります。その中で、熊本県の鞠智城については、大野城（福岡県）や基肆城（佐賀県）の背後にあって、有事の際に、この二つの城へ食料・武器

を供給し、兵士を送り込む「兵站（へいたん）基地の役割」を担ったとのイメージが強いのです。でも、先生のお考えでは、取り分け、有明海を重視されているようですね。敵勢が有明海方面から攻めてくる想定のもとで、鞠智城が築造されていると、推定されているようですが。

日野

はい。私は、以前からそのように考えていました。鞠智城は単なる兵站基地の役目だけは無いと思います。

大田

それから、鞠智城と軍団との強い関わりも御指摘いただきました。阿蘇の「二重牧（ふたえまき）」の事ですね。非常に驚きましたが、その辺を、もう少しお話していただきたいのです。「馬の供給」と言うような補足的なことをお願いします。

日野

牧の事ですね。ところで、群馬県では、新幹線と高速道路などが建設される時、

かなり広範囲に発掘調査が行われました。その結果、「牧の跡」が出てきたのです。遺構も立派なものがありました。それで、結果として、意外な事ですが、牧というのは想定していたよりも、範囲が広がったとの感想を持つに至りました。牧という地名が、数か所で残っています。なかなか、規模は掴み難いのですが。九州では、九重の高原地帯は、夏でも涼しいですから、家畜の飼育にはもってこいの場所でしょう。そこからどの様にして、伝馬に使うような指示がなされたのでしょうか。距離はかなりあります。軍団があった時代は『延暦交替式』があったと思いますが、これに、何か書いてあったのではと、思っています。でも、少し詳しいお話をと依頼されても、正直なところ分りかねます。でも、やはり、阿蘇から現在の大分県直入郡にかけての一带は、高原で馬に乗る兵士、つまり騎馬兵にとっては、もってこいの場所だと思えます。そういうものを睨みながら鞠智城の場所を考えてみたいと思えます。

船で、有明海から菊池川を遡れば、菊池あたりまでは、昔、船でゆうに遡れました。起点を押さえるという意味では、内陸部の現在の地点に鞠智城を造営

して、次に、菊川河口にあたる玉名に大きな港を設けます。つまり、玉名―菊池―阿蘇のルートは、『日本書紀』にも記述されている様に、極めて重要なルートなのです。

その様な所に、日置氏を置いたか造ったかは分かりませんが、日置関係の日奉りベースを大量に置いていたようです。また、軍事的な部民である大伴氏を菊池郡にも設けていたようです。ちよつと、答えになりませんが、牧の事は、まだ良く分かりません。おそらく、奈良時代にも、二重牧から、馬を相当、供給していたと考えて良いと思います。具体的なことは、まだは分かりませんが。牧は、私の話の中でも、牧の名前が出てくるだけで終わってしまいます。奈良時代には、もっと、あつたような気がします。延喜式でしか考えようがないのも事実ですが。答えになっていませんでしたけど。

大田

いえ、十分なご回答です。館長講座が始まる前の打ち合せで、ご質問しましたが、鞠智城の場合には、国書の記述にもある様に七世紀の終末から九世紀の後

半まで存続しました。でも、大方の考えとして七世紀終末の東アジアの緊迫の中で造られた鞠智城、なぜ九世紀の後半まで生き残っていたのかということについては、明確な答えを見出せないのです。けれども、先生のお話では、九世紀代もやはり大陸からの侵攻の危機というものが感じられたと、お話になりましたが。

日野

そうですね。皆さんにお配りした資料の二枚目をご覧ください。九州の駅の名前を書いた地図の左側です。貞観一八（八七六）年に、現在の平戸島と福江島（長崎県）を合わせて「近島」という国が、肥前の国から分かれるのですが、そこに新羅（しらぎ）人が度々やって来ました。何をしに来るかという、五島列島は、銀を産出するのです。その銀を目当てに来るのですよ。それから、平戸島の西海岸には瑪瑙（めのう）が出ます。そういうのも視野に入れていたと思います。亡くなったある考古学者が、博多駅の宝石店に翡翠が並んでいるのに気づきました。そこで、その店主に「これはどこから入手されたのですか」と

聞いたら、「ある島からです」と、それ以上の答えは、返ってこなかったそうです。でも、この話を聞いて、私はピーンときまして、平戸島だと思いました。それを狙って、度々やって来るのですね。

肥前の国府は佐賀にありますから、有事の場合は間に合わないということ、大陸を意識した防衛を考えて、八七六年、近島を肥前の国から独立させました。それが九二七年の『延喜式』には記述がないということ、おそらく、これは延喜式がいつ元号を締切ったか分りませんが、九一〇年前後としますと、近島は、わずか二〇〜三〇年でなくなったということ、

それから基肆の軍団が出て来るのは、近島に新羅人の上陸があります。自分の国は自分で守ります。近島は肥前の国ですから、肥前の軍団が兵隊を持って行き、そこで戦闘して百何人か撃ち殺したという記録がでできます。九世紀の初め頃ですが、その頃でも、そういうものに意識は強かったのではないでしょう。博多湾にも新羅の船が、都に送る献上船を狙ってくる場所がありますので、やはりそういう意識はあって、やはり、まだまだ守らにゃいかんという

意識はあったのではないのでしょうか。

そういう意味で私は他の城も機能していたと思います。いかんせん、記録は
ありませんが。調査されていませので、よく分りません。

大田

そういう観点からいきますと、鞠智城そのものも大宰府の兵站基地という考え
方もさることながら、九世紀までの云々ということになると、鞠智城の
役割というものは、私たちが考えているよりは、もっと強く、国防の一端を担っ
たという捉え方をしていいのでしょうか。

日野

どうでしょうか。細々と継続していたのか。「いざ鎌倉」のときに逃げ込まなきゃ
いかんということなのでしょう。そのあたりはどうでしょうね。

大田

私たちが館長講座の中で、九世紀代の鞠智城はどういう役割を果たしてきたの
か、ということに関して、国家の国際緊張が緩和した後の一地域の警察権力の

役割を担って来たのではないかと話してきました。先生は、漠然と菊池軍団との関りといっておられました。警察という発想は、先生のお考えからすると少し生ぬるい状態ですかね。

日野

私もよく分らないというのが正直なところです。他の朝鮮式山城がもっと発掘されて色々なことが分ると、比較ができるのではないかといつも思っているのですが、なかなかそうもいきません。『日本三代実録』を見ますと敵の新羅が博多湾周辺に度々やってきておりますので、やはり意識はしていたのではないのでしょうか。ただ有明海の方にはあまり記録がないので、意識が薄れていったのかも知れませんが。やっぱり「いざ鎌倉」ということも考えていたのではないのでしょうか。

大田

お話の中で、軍団が一千人とおっしゃいましたね。それで私が気になったのは、鞠智城の城内から確実かどうか分りませんが、かまぼこ形の建物が出まし

日野

て、それについて兵舎という見方をしまして、その一棟を復元しています。けれども実際には、並列して二棟出ています。それで今の縦長のかまぼこ形の兵舎には五十人という兵士の数を推定していますから、二棟で百人になるのですね。つまり、軍団と鞠智城との関りというのが、なかなか難しいと思うのです。

軍団の研究をしておられる方がいるのですが、私はそんなに詳しくやっていませんけど、考えておかなければならないのは、現代でもそうですけれども、平時編成と戦時編成とは違うのですよ。そこが一番ポイントですね。

私は地理をやっていますから歴史とは違うのですが、平時編成と戦時編成は、分けて考えないといけません。この一千人というのは、これは平時編成なのです。だから、そこから戦時編成になって行く人がいると思うのですが、戦時編成がよくわからないのです。平時編成と戦時編成は違います。これは現代の自衛隊でも違うと思うのですが、比べていいかどうか知りませんが、日本の帝国陸軍でも違っていたと思うのです。けれども詳しいことは知りません。

平時編成と戦時編成は違うという事ですな。

ですから、もう一つ考えておかなければならないことは、北部九州に「鎮（ちん）」という言葉が出てきます。二つほど出てきますが、「鎮」と言うものが、設けられていたのか。実は二日市（福岡県）の南の岡田遺跡で、それらしき建物遺構が出てきているので、駅にそって「鎮」が設けられていたのではないかと思います。記録的には二つしか出てきませんが、「鎮める」という字を書くのですが、おそらく、これは戦時編成に組まれた兵士が駐屯して見張りをしているのではないかと。こういうのが北部九州に二ヶ所出てきますが、その一つは場所が分りますが、ひよつとしたら、そういうのが点々と設けられていたのではないかと。記録には出てきませんが、他にもあったのではないかなと。そういうことも岡田遺跡でそれに類するような遺構、私もちょっと正確なことは忘れませんでした。岡田遺跡は大宰府の少し南のこの辺りです。それが「鎮」であるという証拠はないのですが、そういった軍団からどういうふうにな戦時編成したか分かりませんが、そういった兵士がいた場所も考えなければなりません。

ん。ひよっとしたら鞠智城にはそういう戦時編成に組まれた「鎮」といった兵士がいた可能性はあると思いますね。もちろん「鎮」の場合は、たぶん食糧とかそういうのは全部、国が支給するものだと思いますが。

皆さんに言っておきますけれども、古代の兵士は食糧から武器から全部自前で揃えて持つて行かなければならない。だから刀を砥ぐために砥石まで持つて行かなければならないのです。現在のように、防衛省に入ったら飯も食わせてもらえて武器も貸してくれるのではなくて、全部自前で持つて行かなくてはならん、ちよっと考えにくいのですけど。日本の古代の兵士はそうだったのです。「鎮」になると、東北でも「鎮兵」というのが出て来ましたけれども、これは全部国が支給していく、その代わり危険度は高いわけです。結局、九州というのは、外は緊張しているけど内部では何も争っていないのです。だから記録に出てこない。言葉は悪いですが、平々凡々なところは記録に残らないのです。たまたま反乱があったときに、ちらっと「鎮」が出て来たりする。

ですから、私はそういった平時編成の鞠智に軍団があったという証拠はあり

ませんから、そこは平時編成で軍団は普通一〇に分けるのですね。百人ずつ分けて三六日過ぎたら、次が来てずっと訓練をしているわけです。これは平時編成で全部自前です。国は、ビタ一文出さないわけですから。だからそういう鎮兵が鞠智城にいてもおかしくないと思います。百人訓練するので、その訓練の合間に来たかどうかといわれると、その辺までは分りかねます。

なぜ軍団の発掘が分からないかと言いますと、出雲の場合に、大軍団というのが出て来ますが、この軍団は軍役所と一緒になんですよ。軍団が郡家の軍役所の端に設けてあったのではないかと、この辺をかなり発掘しましたけれども、全然遺構は出てきません。郡家と同所にある軍団が具体的に敷かれたのは、これくらいしかないのです。郡役所と一緒にあったということですから、もし菊池軍団があつた場合には、西寺の郡家と一緒になって、そこで訓練をして、訓練が鞠智城であつたかどうかはわかりませんが、そこで三六日間の訓練をしたら次、また次ということですよ。「いざ鎌倉」の時にはみんな出て来いといって一千人になったかも知れません。ですから、そこから鎮兵として戦時編成に

入れた組織もあったのではないかと思います。その辺は記録が無いものですか、申し訳ないです。

「鎮」ということを考えると、九州で確か富野の鎮と長谷の鎮と何人いたか、わからないですが、平時編成からいつでも戦時編成に組みこむことができると思うのです。その辺の具体的な記録がありませんので、本当に軍団関係というのは資料がないのです。名前が出て来るだけ御の字という感じですか。そういったところでよろしいでしょうか。

大田

資料に九州の地図が載っておりますが、先生のお話の中で官道の道路網の配置図が出てきますが、北半分に集中しておりますして南のほうとの大きな違いがあります。この辺のところを少しお話いただきたいのですが。

要するに、南のほうは隼人対策というお話がありました。が、道路が複線になっているとか、そういうところをお願いいたします。

複線になっているというのは、こういうことです。関門海峡があつて、ここが今の博多です。大事なところは唐津です。ここが佐賀、ここが久留米、この辺りが熊本です。ここが海岸線でここが海ですね。敵が攻めてきた時に、ここに入つて退治をするところなつてゐるわけですね。そしてもう一つこちらが複線になっています。結局こちらからも遠賀川のところにも私はあつたと思うのです。それからこちらも久留米からこうなつて後ろからこう周ると。

それと、この久留米のところ、実はこちらにもう一つこうあつて、ここが南関のところでもまたこうなつて、ここが鞠智城ですね。そうすると有明海から敵が来たら、とりあえずこのルートで頑張ると。そしてこれがダメだったら、次はこの動線で回ると。そういう二重になつて、ここがやられたら次はこの路線で頑張るとそういうふうにも二重になっているわけですね。

だから、私が大田さんと話したのは結局大宰府がここにあるわけですが、これからこちらのラインですね。このラインを非常に重視してゐたのではないかなど、そういうことです。それから南側の方も宮崎から水俣に抜けるルート

と鹿兒島を通ってこう抜けるルートとこれもたぶんあったと思いますが、これはちょっと怪しいと思うのです。これも薩摩隼人がこの辺にいますと、そんなに暴れていないと思うのですが、こちらからも複線になって回すことが出来るということですね。南と北に複線になっていますね。こちらの薩摩隼人は、小さなトラブルはあったかも知れませんが、そんなに乱闘は無かったのでしょうか、記録には残っていないですね。あつたら記録に残っていますから。大伴旅人は隼人征伐に行くわけですが、こういうふうに複線になっているわけです。こちらがダメになったら後ろで回すということですね。古代ローマ帝国もこのようにゲルマンがいますと、ここに柵を作ったのです。ローマの場合は、実はこうやって後ろに回ることもあるのです。複線になっているということで、これはフロンティアではこういうことを考えていたのかなということ、日本もそういう発想もあったのではないかなと考えると見たのですが。

大田

複線というか、最前線のラインと後方ラインというか、その二つの線でもって

守るということを考えて良いわけですね。

日野

考えていいと思いますね。

大田

私達の場合、考古学をやっている人間としては、神籠石系山城と朝鮮式山城とありますが、そういったものの整合性あたりは非常に難しい部分があつて、有事の際の緊急配備網というふうに受け取っていたのですが、先生のお考えの前線基地とか後方線と言いますか、そういったかなり計算された城域の配置というものが、幹線と軍団のつながり等も含めて、それはどういうふうに考えればいいのでしょうか。

日野

難しい問題ですね。軍団が点々とありますが、どういうふうに考えていたのでしょうかね。基本的に大事なことは、先程申しましたように、今の五島列島に五つの船に乗って新羅人がやってきた。その時に基肄の軍団から兵士を引き連

れて戦い、百何人が撃ち殺しているのです。九人ほど捕まえたという記録はあるのですが。自分の国は自分で守るといのがまずは大前提ではないでしょうか。そうすると熊本の場合、鞠智城だったらこの四軍団で守るとい事でしょうね。そして他のところは、筑後は筑後の国、肥前は肥前の国、筑前は筑前の国。問題はその上をいく、恐らく戦時編成になると思うのですが、大宰府でどう考えていたか、ちよつと記録ありませんし、難しい問題ですね。何か組織はあつたと思いますが。国司かなにかに連絡して、どれだけ軍を出せというよ
うな計算はしていたのではないかと思うのですけどね。

それと、もう一つ防人がプラスされます。そうしますと防人の配置の問題も難しいのです。唐津で出て来た記録は、甲斐の国（今の山梨県）から派遣された防人のことが書いてあるもので、港を守っていたのでしょうか。防人をどこにどう配置したのかというのはなかなか難しい問題で、これに防人がプラスされるので難しいですね。防人は鎮兵みたいなものでしょうから。天平時代に、九州に三千人来ていたというのは分つて居るのです。三千人程の兵隊が帰る記

録が周防の正税帳に残っています。少し欠けていますが、約三千人が、三つの

班に分かれて帰っています。当然三千人が配置されていた。三千人という軍団三つ分です。何処にどう配置したかというのは全然分らないですね。これは難しい問題です。山城なんかにもかなり居たのではないかと。如何せん、これがどこに配置されたのかわからない。わからないこと尽くめで、皆さんから見ると、もどかしいかも知れませんね。

大田

お話をここで整理したいのですが、私たちのこういった古代山城というものが、七世紀の後半という東アジアの緊迫した情勢と関係が非常に強いのです。それでもつて造っていったと。神籠石の場合には、斉明天皇云々といいますが、集中してその時期に当ててしまっているのですが、先生のお話では何度も出てきましたが、中九州から北側に向かっての九世紀まで下った国家防衛の中の城域配置というようなものと考えれば、こういうものは理解しやすいですね。

私たちはあまりにも白村江の敗戦ということに囚われ過ぎてこだわっています

すが、やはり緊張関係というのは、国家の外からの侵略に備えようというのがあったわけですね。そのところ、今日聞いて面白い部分がありました。私たちが見逃していた部分というか。

日野

ご存知のように怡土城が八世紀後半でしょう。あれが何故あそこに出来たかというのと、薄いからという感じなのかなと思って、どうも『延喜式』の前の『延暦交替式』が残っていたら、本当にいろんな事が分かるのに。交替式はあったのですが、何処にも影も形も全然残っていないと思いますね。残っていると非常に良かったのですが。

大田

文献資料が欠けているのと、あとは先生も再三おっしゃっていましたが、鞠智城を除いて他の所の発掘が進んでいません。だから時代的なものも押さえられないというか、それが一つの大きなネックになって、固定観念というか、古代山城、白村江の敗戦、国家存亡の危機というのに縛られていくと、神籠石

系山城の配置とか朝鮮式山城の配置というのが、なかなかわからないというこ

とになりますし、鞠智城が大宰府の兵站基地ということで、内陸部へ六二km離れた位置という部分も、有明海方面からの攻撃に備えれば存在価値もわかってくるし、二重牧の馬の供給地点というか、そういう事も全部トータル的に考えたら見えてくるような感じもしますね。これは先生難しいですね。

日野

これは本当に資料が一回チラッと出て来るくらいですね。本当に難しいですね。ご存知のように、基肄城なんかは修理したと書いてあるけれども、それが出てこないものですかね。微々たる活動でも記録でもあるとおもしろいの、何にも出てこないのです。

大田

先程、遠賀川と名護屋城二箇所くらいに古代山城があつていいとおっしゃったのと、稻積城と三野城との整合性はないですよね。

日野

はい。分りませんので、あくまでも憶測の想定としては、そういったところですかね。古代の交通の要所は現在も変わりませんので、やっぱり名護屋城、場所が良いですから秀吉が目をつけたというのは何らかあるのではないかと気がしてしょうがないのですが。

大田

私はよく矢野君と話をするのですが、古代山城というものが、もっと眠っているというか、分らないのがあるのではないかという感じがしています。

日野

広島県の常城もよく分りませんし、それから長門城も記録では一つか二つかで採めるのです。場所も下関の何処にあったか、今一つよく分らないし、結構まだ記録に残っている城でも分らないものがありますね。山陽道筋でもありますし、難しい問題ですね。

大田

亡くなった田邊哲夫先生がおっしゃいましたけど、玉名の方の港の近くにも

あつただろうし、南関との繋ぎの間に、ポツンと鞠智城がありますので、少しそういったものが分ればと思うのですが、なかなか難しいですね。

確か私も探したのですが、南関のセキアヒルズというところに、神籠石があったという噂もありました。場所はわかりませんでした。

だから今日先生に資料を提供できるのは、後ほど差し上げますけれども、三角と対比している天草に防人伝説のある島があるという事だけは掴んでいるわけです。先生なかなか難しい。先生と私では対談にならない。

日野

防人がほんとに何処にどういうふう配置されたのか。壱岐の島は点々と、記録によりますと、岬のところにチョビチョビ配置した事が想定されるのですが、難しいですね。

大田

今日はすみません。対談にならないほど難しいです。問題が大きすぎて先生のお話をうかがって、私なりに解釈できる事は、七世紀半ばの白村江の戦い後の

日野

国際的緊迫情勢の中で城を配置し、そして待機したけれども、唐と新羅の連合軍は攻めて来なかった。それなのに何故、鞠智城が九世紀の後半まで残ったのだろう。先生のお話をうかがうと、九世紀まで火種はあつて、外国からの侵略もあるという中で、やはり、九州自体が防衛していくためには官道（昔の国道）があつて、その沿線に軍団を配置して、それからその軍団と城塞の繋がりと、うものを眺めていったら分るのではないかな、という気持ちは致しましたけれども。先生これくらいでよろしいでしょうか。補足はございませんか。

こういう駅制がいつ頃、終わったかという事ですけど、山陽道の小倉の辺りに、十一世紀の初めに、記録の中に古い駅というのが出てきますので、大体九〇〇年代の終わり頃にはもう既に機能していなかったのではないかと思うのです。いつ終了したかといわれると、よくて十一世紀の初め一〇〇〇年ちょっと出たくらいで終わっているのではないかと。ですから、よくよく見て十一世紀の初め頃までは、なんとか機能していたと思つています。それ以降はもうバタバタと

潰れていったと考えていいと思います。

大田 と、いうことは、こういったいわゆる防備体制というものは大体それくらいで

終りと。

日野 そうですね。中世のどちらかになってくるのでしょね。

大田 そうですね。皆さん、そういう事で今日は、私の方で十分に日野先生に質問で
きませんでしたけれども、お許しを願いたいと思います。

最後にドイツのスライドを見せていただきましたけれども、ちょっとお伺い
したいのですが、ああいった砦というものは、ぽつぽつ復元をして丘陵あたり
も復元して観光施設的に行っているのですね。

日野 見張り台は、そうですね。いろんなタイプがあるのですが、結構ローマ時代は

記録があるのです。それによっていつ頃できたかが分りますので、そういうので復元したりしております。それから一部柵の跡を復元したところも点々とありまして、観光とっていいかどうか知りませんが、ドイツ人、ヨーロッパ人というのは歴史を大事にするところがありますので、結構田舎の方に復元された、私も行った事がありますが、そういう田舎にもドイツ人は結構来います。日本人だったら考えられませんけれども。こんな超ド田舎までよく来るなど思つて、びっくりします。復元されたものが点々とあるのですが、そういうものを紹介する本がありまして、例えば日本では九州の朝鮮式山城巡りとかいうコースが、地図と写真があつて、どこに行ったら旅館があつてと案内してあつてですね、だから山の中を歩いても結構ドイツ人に会いますよ。こんなところをみんなよく歩いているなと思うのです。自分も歩いていますけどね。

大田

それは、先生、道標あたりは当然完備しているでしょうね。

日野 道標も結構ありますね。全部とは言いませんけれども。

大田 付帯施設の駐車場とか、便益施設というものもあるのですか。それとも関係な

くポツンと復元しているのですか。

日野 例えばキャスルとかいう所はだいたい場所が分っていますので、そういうと

ころは全部復元しますとお金がかかります。門だけとかこの辺だけ復元して、あとはこの辺を少し整備して立看板を立てて、どういうふうに配置があったかとか紹介して、横にちよつと駐車場があったりして、そういうのが点々とありまして、全部回っていたら私なんかパンクしますので全部は回りませんけれども、かなり行っています。

もつと言いますと、オランダとの国境に近いクシヤンペンという町がありまして、そこに古代の植民都市を造ったのです。それがこういう形にあるのですけれども、佐原真氏も行った事があるのです。私も行っているいろいろ話したこ

とがあるのですが、ここを全部発掘しようとして市の財政を傾けて有名になっちゃたんですよ。市の財政が危なくなっただけのことがあるのです。現代だと熊本県の財政がズーンと傾くような形になって、これはいかんということになって、今は縮小していますけど、塀を復元しています。その塀がまたものすごく高さがあるのです。復元をチョコチョコやっています、チョコチョコ行くのですが、大分、進展しているなと思うのですけれども。なかなか大田さん、掘るといするのは時間がかかりますからね。そんなに何年ぶりに行ってみてもあんまり進んでないなと思います。ただここで感心するのは建物が崩れたまま復元しているのです。倒れた時のものを建てて神殿の中を柱も倒れた形のままなのです。

大田

じゃ日本みたいに入れかえるとかしないのですね。

日野

はい。そのまま。

実は、ここはライン川が流れる地で、川で削ってる跡がありましたね。このすぐ横に軍団があるのですよ。その軍団の名前が、こんな感じですね。こう書いてあるのです。おわかりですか、ベテラ軍団です。英語でいうと「ベテラン」。老兵を集めているのです。老人の年取った兵隊ばかり集めた軍団もあつたのです。それでベテラ軍団というのです。Nがつけばベテランになるのです。そういう軍団がここにペタツとくっついて置かれて、上段はオランダとの国境近い所にあるのですが、だからさっき言いましたようにずっと昔、市の財政を傾けたことがあるのです。今はそれを辞めているようです。いろんなタイプがあります。全部話をして時間もありませんので。

大田
私たちは、よく中国に行っています。中国は大変ですよ、砂漠がたくさんありますし。

日野
ただ、言っておきますけれども、基本的には石で造っているから発掘してもよ

く出て来るのですよね。日本のように紙と木ではない、石ですから。ちよつと掘ったら遺構が出て来るので、羨ましい限りです。その意味では。私も何度かお邪魔したことがあるのですが、一mも掘ったら、ほんと遺構がよく遺つていきます。

大田

矢野君羨ましいだろう。

彼が国営公園化に向けて大きなニュースを「なんか出せ」といわれまして、プレッシャーがかかってましてですね。非常に焦っておりますけれども、なんとか三月位に発表は出来るんでしょう。それでは、日野先生、どうもありがとうございます。

平成20年度第2回館長講座

(平成20年7月13日開催)

『建築からみた鞠智城』

【対談】

小西龍三郎 (元九州造形短期大学教授)

大田 幸博 (熊本県立装飾古墳館 館長)

大田幸博

みなさんこんにちは。梅雨が明け、暑くなつて参りました。今日はたくさんの方に御参加いただき、ありがとうございます。平成十四年の温故創生館の開館から「鞠智城館長講座」をやっておりますが、今回、初めて『建築からみた鞠智城』で、建築が専門の検討委員、小西先生から為に成るお話をうかがいまして、感謝しております。本日はよろしく願います。先生と打ち合わせをしました時、私の勉強不足が露呈しました。「不動倉」とはイメージとして米倉と言うか、場所を固定しない保管庫だというイメージを持っていましたが、実際はそうでなく、米などを保管して開けないそうです。それをちよつと細かい所から説明をお願いしたいです。

小西龍三郎

レジュメで言いますと六頁のところ、ちよつと復習になりますが、不動倉と言うのはお米を、その当時は『和泉国正税帳』と書いてあります様に、いわば税金、お米を正税として集め、そのお米の約六〇%を不動倉に収蔵する税制が律令の中にあり、一〇〇二〇年近くかけてお米を貯めていくわけです。

ここにも書いています『越中国交替帳』の中の十九番目の建物などは、お米を貯め、十六年目にいっぱいになったところ、倉の扉を閉めて、鍵を国司が管理するわけです。その当時は国司も開けなかったらしく、その鍵自体を奈良の税務長官みたいなところで一手に握っていて、どんな状態になってもその倉は開けられなかったと言う記録があります。そこで開けられない倉が一六〇年後の九一〇（延喜一〇）年になって開いたと言うことです。果たして、この不動倉の制度が正しかったかどうかは別として、平安頃、九世紀になりますと不動倉が燃えたと言う記録がたくさん出てきます。少なくとも国のそこで採れたお米の六割を倉庫の中に入れて貯め込んでいって 飢饉が起こった時などの老人とか子供達が苦しんでいる時にしか使えないというのは、やはり税制としては問題があった。そのためにも時代が下がってくると開錠といいますが、不動倉を国司達が開けたという記録は残せないものなので燃やした事にした、というふうな記録もあるそうです。律令制における不動倉の制度というのはよほど厳しいと考えられるかと思えます。

大田

税金の六〇%が不動倉に収蔵されたとありますが、そうすると鞠智城から「秦人忍□(米)五斗」いうか、その当時の税における木札が出てもおかしくないですね。

小西

そうですね。実際、不動倉に何年かかけて米を入れていくたびに、例えばどこ誰がいくら納めました、という記録があつて然るべきだと思います。

大田

その木簡が出てから十年以上が経ちましたが、発見当時は「こういった軍事施設には、大宰府に納税した米を分配しているので木札が出てくるはずはない」と言われたのですが、木簡が出てもおかしくないですね。

小西

そうですね、ある意味、城の性格もあります。そこに倉庫が有る以上は当然軍用とは言いませんが、そういう組織づいていないと出来ないですから、木簡も出てきて当然だと思います。

大田 出て良いわけですね。もつと出ても良いわけですね。

小西 はい。

大田 もう一つ、先生のお話で非常に面白かったのは、一六〇年ぐらい建物が機能しているという事は鞠智城の歴史は二〇〇年くらいありますが、実際先生が分類されていたように四回くらい建て替えては搦んでいます、城内の建物の大幅な変動というのではないのでしょうか。

小西 先程も少しお話ししましたが、建物というのは、例えば礎石があれば特に倉などは火災にでも遭わなければ、何年でも持つ建物であると考えられます。繕治期に建て替えや建て加えられた物もあるでしょう。先程の東大寺の正倉院にしましても、もう千年以上、管理さえ良ければもっているという訳です。

大田

私は米をずっと保管する、そんなバカな、本当に保管できるのかな、と不思議だったのですが、ある本で読むと最近の農薬を使った米というのは保管していると真っ黒になってくるが、農薬を使わない自然栽培の米は何年たっても白いままだと読み、なるほどなあと実感をしました。今日は色々な事が勉強になりました。

温故創生館ができた時、「なぜこの柱穴だけで建物ができるのですか」と何回も質問されたのですが、私はその当時から「色々な物を参考にしながら想像復元をしています」と答えております。先生からも改めて遺構をベースにした建物復元というお話を伺いたいのですが。

小西

レジュメの六頁に概念図のようなものを書いております。これは先程から何回もでてきます文献から紐解いたものですが、長さと広さ、奥行、梁、桁行き、梁間、高さが載っています。この場合の倉高というのはあくまでも床からの高さが三・七mであるとか、委高と書いてあります。倉を満杯にして扉を閉めて

不動とする、また、幅2mくらい、奥行1・5mもないくらいの空間が塞という部分であり倉にあること、倉の扉が何処に何ヶ所あったか、文献でやっと見えてくるようになりました。わかってきたのは、それほど昔の事ではありませぬ。逆に今度は発掘の方で見ますと柱の根元がずっと見えているわけで梁間に何ヶ所柱が建っていて奥行に何本建っていたかがわかるという概要が見えてきます。そういう事をやっていますので、特に、ここ十年ぐらいで古代の倉とか建物に対する色んな発掘事例とか知見が増えています。これが建った頃はやはり想像するしかなかった所もあり、根拠にそった復元というものが少しずつ出来てくるようになったところ、最近の古代建築の整備をしていく中で見えてきたのだと思います。

大田

やっぱり十年間でずいぶん様変わりしましたね。先程、先生がおっしゃいました米倉の構造をもう一回これを使ってお願いできますか。米俵を入れるというような感覚をもっていたのですが、米俵ではないのですね。

当時、米俵はありません。穎（えい）というのが従来のやり方で穀というのが後のやり方です。これはどちらかというところの場合の倉の絵ですが、その場合は高床の柱がありまして、ここから下が例えば1mとか一・五mあるわけです。ここが倉の高さといわれます。ここが大体4mくらい有ります。それに対して先程、税務署の職員が印をつけたという委のラインがここにありまして、ここまで貯まったら満杯ですよというラインがあります。この部分が倉の床になるわけですけれども、ここは基本的にはダートとお米を流し込むわけで、タンクみたいなもので上から流し込んで貯まっていく様子をイメージして下さい。当然ここには屋根がかかっていますので今のタンクのようににはどんどん注ぎ込む事はできません。どうやって注ぐかと言うと、塞とよばれる狭い空間、長さ一・九m、平均が二m、奥行が一・二四二mぐらい。普通でいう長さが畳一枚分くらいという事は、当時、古代の扉というのは開き戸、それも内開きですから、ここにこう二枚の開き戸があつて、その開き戸をあけたところに三枚の大きな楯がある。いわば壁があると思つていただければ、三mくらいの壁の上に梯子

みたいなものを使って米を注ぎ込んで、それを十八年かけて満杯にする。そういう形で最終的に扉を閉じて不動とする。大変な加重がかかって下の方のお米は潰れると思います。それを避けるために、もうひとつ穎というやり方があります。倉の下の方には穎と言うお米を敷き詰めた記録があります。お米の粒を最初からまくのではなくて、最初、空っぽの状態で下の方に穎を敷き詰めて床下からも少し空気が入るようにして、閉じても蒸れない状況を作った。穎の場合ですと籾殻だけでなく、茎がついていますから、ある程度圧力に耐えます。穎はそういう使い方もします。

先程言いましたように、「屋」と呼ばれる側柱だけの真ん中に柱がなく、床が低い土間のような棚の上に穎を積んで行く穎倉、いわば「屋」と言うものもあつたであろうと。大きくいって二種類の倉が想像できる。特殊なもので言いますと、先程言いました「法倉」、少し説明がわかりにくかったかと思いますが、勘弁して下さい。

大田

「校倉造（あぜくらつくり）」と言うのは単純な発想です。雨が降れば組み合わせの木が伸びて蓋（ふた）をして乾燥すれば乾くから通気性がいいでしょう。しかし虫が入りますよね。

小西

校倉から板倉が主流になってきます。校倉の場合ならば断面が六角形をしていますが、一つの木材です。正確に言うくと六角形ですが、三角形の材を組み合わせて造っていると考えると良いです。館長がおっしゃるように、きっちり隙間のない建築というのは非常に造りにくいだろうと。虫も入らない事はないだろうと思います。柱の側面に縦溝を掘って板を落としこむと横広の板を落とし込む板倉になってはじめて内側もピッチとした四角になりますし、虫も入りやすいということも板倉が主流になってきた感じがします。

大田

学生時代に習った「校倉造」の建物の構造からよりも板倉造の方が技術的に進歩したといえますね。

小西　そのとおりだと思います。

大田　板倉の場合にピシッとなってしまうので、通気性は関係ないですよね。

小西　当然木ですから、乾燥・収縮はします。ただし上からパチッと押さえ込まれて
いるものですから、校倉のように「すく」という事はあり得ない。一六〇年持
つという事で、私も半信半疑なのですけれども　記録に持つと書いてあれば信
用せざるをえないな、と考えております。

大田　「校倉造」というのは、理想的な風の通気性があるというけれど、構造的には
板倉の方が強くて備蓄の場合も板倉がいいというのは面白いですよね。

小西　そうですね。

大田 学校で習っていないですもんね。板倉とかいうのは。これは最近の話ですよ。

小西 そうですね。この板倉が主流だったという事が解ってきたのがここ十年ぐらいの話です。

大田 そうすると連動してきますけれど、日本の場合は木造建築ですよ。世界最古の木造建築の法隆寺も「世界最古」と言っていますけれど、日本の風土からいったら何度も何度も改築して行くでしょう。そういう所は途中で話が抜けますよね。

小西 そうですね。今、福岡に住んでいますけれど、重要文化財で箱崎宮があります。建ってから四百年くらいですけど、やはり箱崎宮に「おやまさん」「ひかりさん」という大工さんがおり、この「ひかりさん」が二十数代続いているのですが、屋根が傷んだら治し、台風でどこかが傷んだら治しという事を繰り返しています。

大田

一六〇年持ったという事はメンテナンスを繰り返していたから持ったという事ですが、温故創生館に飾ってありますが、平瓦とか丸瓦には釘穴が無いのです。大雑把なことをしているので、やはり、かなりのメンテナンスが必要だったのでしょうか。

小西

釘を使うのは近代になってからです。棧瓦のそれも引っ掛け棧瓦というものになってからで、それ以前は当然「えつり」という竹で編んだ棒みたいなものが下にあつて、その上に杉皮を貼りその上に土を十分に盛って、土の粘性に任せて平瓦と丸瓦を乗っけて行くというやり方です。やはり土が風化して行くまでに何十年とかかります。その間は土の粘着力で結構しっかりと持っているものです。

大田

平瓦も復元しますと、五kgとか八kgありますから、瓦の重さで変わってくるわけですね。

小西

そうですね。重さで持っているようなものです。ただし やはり地震がきた時には、大変な加重がかかりますから、江戸時代には軽い平瓦と丸瓦を組み合わせた棧瓦が出来たと。

大田

もとは無かったのですね。

小西

もともとは無いです。

大田

ヨーロッパの石造建築物は当然保存の仕方は良いですけど、ヨーロッパでそういった柱だけ立っている、保存といいますか、修復復元したとは余り聞かないのですけれども、それはヨーロッパ的な考え方というのがあるのですか。

小西

世界遺産の話に近づいて来ますけれども、ヨーロッパの世界遺産の考え方というものの根本には、真正性というのが非常に重要視されています。その当時に

造られたものかどうかというような事が重要になってきます。ですからアテネの神殿にしても前まではそれに手を加える事自体が、アクロポリスの真性を犯すものであるとアテネ憲章を含めて、そういう時代が長い事ありました。ただし日本でそれをしますと、たとえば法隆寺をアテネみたいになると、あつという間に屋根は破れ、白アリが入つてボコボコの家になってしまいますので、日本ではとてもあり得ない考え方です。日本とヨーロッパの考え方は違います。そのアテネ憲章の考え方自体も今アクロポリスが大気汚染で、随分傷みが激しく、やっぱり補修せざるを得ないであろうところに来て、事実やっています。ですから最近はずいぶん時代時代で変化を見せながらも、やはり日本の建築は真正ではない、という批判があるというのは事実だと思います。

大田

平泉（岩手県・中尊寺）の建物が、今回、世界遺産の候補から外れたというのは、そういったヨーロッパ的な考え方があつた事は事実ですか。

小西

ええ。それ以外にも色々あります。日本でも文化的景観という言い方ですが、例えばある綺麗な棚田があつて、これを文化的景観として保存しましょうという日本の考え方がありますが、やはりヨーロッパ的景観の考え方とちよつと違うというか、それを話し出すと大変な話になるのですが、特に大きいのは館長がおっしゃつた平泉の建物ですが、八百年間保たれてきたというのは、とても向うの人が考えられない事なので「なんかやつたでしょう」と常に思つちゃうんですよね、それがやはり平泉が候補になれなかつた一つの大きな理由ではあると思います。

大田

先生、世界遺産というのはおもしろいですよね。世界遺産になつたからといって公費は何にもないのですね。

小西

何か治すのに、お金をくれるのでもないですし。

大田　そうですね。だからやっぱりあれば、世界遺産という冠が欲しいですね。

小西　冠も欲しいですし。

大田　地域起こし。

小西　地域を一つにまとめるのには一番いいやり方ですから。例えば長崎に教会群と
いうのがありますが、教会が点在しているものをひとつ、保存する方向に持っ
ていきますよと、広い地域の人が同じような考え方を持つという意味では非常
に良いやり方、効果的なやり方です。それがやはり今の日本での世界遺産ブー
ムと言うのでしょうか、ブームを起した大きな理由だと思えますね。

大田　すごい経済効果があるみたいですね。

小西

効果もあるでしょうが、もともと住んでいた人口よりも多い観光客が一日に訪れて、人を見ているのか遺産を見ているのか判らないような所もあります。やはり、そのあたりの事を考えながらやらないといけません。

大田

だから鞠智城の場合の国営公園化というのはやっぱり、冠がほしいんですね。それとやっぱり集客数を増やす、平成二十三年の九州新幹線の全線開通など。うちが狙っている部分と世界遺産が合い通じるものがあるような感じがしています。しかし、世界遺産、あれは数が多すぎますよね。

小西

えっとそうですね。今回、平泉のあれを受けて鎌倉が辞退しましたよね。

大田

もう辞退したのですか？

小西

辞退が出ています。

大田 今、暫定リストが八ヶ所、あと、まだ二〇何ヶ所あるみたいですね。

小西 その後ろにはまだまだいっぱい控えているという話です。九州だと長崎の教会群です。その次が万田鉱の近代化遺産ですね。

大田 そうです。

小西 石炭とか色んなものを含んでいるんです。その後ろにまだですね、五つぐらいあるみたいです。

大田 阿蘇山。

小西 ああ、阿蘇山、阿蘇山は良いですね。あと国東半島、それから宗像大社です。これだと思うところは、やっぱり、みんな手を挙げたいと思つているところが

ずらっと揃っているのではないのでしょうか。

大田

国営公園化を目指している鞠智城の場合は、もう目的意識がはっきりしているし、競合している所は無いです。狙いは、私は良いと思うのです。それで、先生が示された建物の復元の所で、将来の国営公園化が実現した場合の姿と言うのが垣間見えてくると思います。

小西

勿論、これは全体の建物を取り上げているわけではないので、倍以上がこの中にあるでしょうけれども、今の所わかっているだけを書いていきます。

全体的な建物の数です。もつと多いと思いますが、大体かたまっている場所は見えてきています。長者山あたりと、もう一つ、町道に近い八角建物のあたりに、二つの大きなゾーンニングがあるというのは見えると思います。

六九八年です。このあたりで、ある意味きちんとしたものが見えてくるかと思いますが、大きなゾーンニングとすると左側の地区、中でも長者山の不動倉、

正倉院です。これは明確にここにあったという事が言えるかと思えます。

大田

鞠智城の場合には文献でいつ出来たという事ははっきりしていないので、推定すると大野城・基肆城と一緒にいだろうと。七世紀半ばと言っていますが、これは文献で出てくる六九八年の繕治期といえ、今復元を目指しているのがこの時期ですから、これぐらいがイメージのひとつとしては沸いてくるという事ですね。

小西

そうですね。鞠智城の一带は最初からお城という機能と、倉が沢山あって備蓄、お米を貯めておく。お米を貯めておく機能は、ある意味、国とか郡衙がやる作業ですから、同じような機能があったと考えた方が良いと思います。

この大きなゾーンニングとして二つあるというのも鞠智城の性格としてあるかなという事ともう一つ、やはりこの当時この山の上にこれだけの不動倉と兵庫、正倉院、それから政庁が並んでいるという姿はかなりの立派な姿だと思

ますので、この付近がもうちょっと見えてくると、実際、来られた方もこれがここにあつた時に大体こんなだったのかなというのが見えてくるといいな、というふうに私個人的に考えております。

大田

非常に興味深いのですが、こののグランドゴルフ場になっていきますあたり、この所に政庁的建物とおっしゃったのですが、これが、小田先生が、考古の分野からいわせると、城塞の中に政庁は馴染まないという事で「区別しろ」というふうに言われてきたのですけれども、やっぱり先生の今のお話を聞くと、当然、こういった役所的なものもあるのだから、こういう物が対として在っても良いですよね。

小西

そうですね。郡衙長というのが、四等官の方が成られるのですが、そういう方がいないと管理が出来ないと思うので、政を行う場所とかそういうのが当然ないと、ただ倉庫だけがあつても機能しませんので、そういうものが対として在っ

たと考えたほうが、私は良いのではないかと思えます。

大田

古代山城でもあって良い訳ですよ。

小西

当然あってもいい。

大田

私が非常に悩んだ事は、政庁的な建物がある事は間違いないのですけれども、おかしいといわれる考古学サイドから話があつて、そうすると鞠智城の危機管理といえますか、そういうのが去った後に地方の郡衙的な役所が、城の性格が変わつていった時に、これができたんじゃないかと言う話があるんですけれども、そうすると矛盾がでてきて、池跡から出てくる木簡というのは七世紀後半と一緒にすよ。そういう意味からすると解釈的には合わせ機能を持った組織としての古代山城というふうに考えた方が理屈は通りますよ。

小西 そうだと思えます。私はそれが一番妥当な考え方じゃないかと思えます。

大田 先生、今日は新たな見解を示されましたけれども、ここには礎石建物、礎石が

復元されていて、回廊が廻るやり方とか、私たちは寢殿風建物と違って馴染まないというふうには、その城塞に馴染まない建物と解釈していますけれども、先生の考え方はお役人が居たと考えていいですか。

小西 私はもうこれは管理、全くこっちの軍用的な要素を持つものとはまったく違

う管理的なものであるというふうには、特に、その長者山の不動倉ですね、とか四九号の動用倉なんかを管理していたのではないかなというふうには今は見てお

大田 今日、打合せの時に、先生から言われましたけれども、この八角形の建物は、今、

一棟を建てています。この建物については、非常に難しい問題があつて建物を

復元する時にその地下構造的にその五〜六m、地盤を下げないとダメだという事になって、遺構を保存するために場所をずらして復元してあるんです。文化庁の方から建物を復元する時に、場所をずらしたらおかしいのではないか、というようなことをいわれた事があつたのですが、それは建築の立場としてどういうふうにお考えですか。

小西

遺構整備を考えて行く時に幾つかの原則があります。ひとつは先程、文化庁が言われたように、もとあつたところの遺構を保護しながら現位置に建てる。というのが一つのルールですね。もう一つ最大のルールがあつて、これは現存する遺構を壊さない、保護するというのが二番目の最大のルールです。二番目のルールの方が実は強く、遺構は絶対に保護されなければいけないという原則があります。ですから二つの相反するルールが選択された場合は二番目のルールを優先して、現位置の遺構が十分に保護されて、かつ上に遺構復元ができればそれが一番良いのですが、当時の技術として使うのであつたとすれば、今のや

り方、遺構を保護しながら、その脇に復元をするという考え方はあってしかるべきだと思います。

大田

国体の時に、八角形鼓楼という塔を復元しました。実際もう一棟出っていて、こちらは低いので八角円堂・八角形堂か、そういうものなんです。二棟並んだら勇壮でしょうね。

小西

この建物が発掘されたとき見に来たのですが、これは対だなという印象がありました。建物を見えますと、同じ位置に再建しようと強い意志が働いていて、三二・三三号の場合は、同じ場所・同じ穴では難しかったんでしよう、ひねりながら、同じ位置に造っているんです。三〇・三一号もそうです。そう考えて見ると場所というのが非常に重要な場所で何か必然性があるのだろうと考え、且つそれは対じゃないと意味がないのではないかと、その当時、発掘現場を見せていただいた時にそういうふうに感じましたけれども、未だにその印象は

変わっておりません。

大田

私たちは平成三年に八角形鼓樓が出た時、韓国京畿道の二聖（イーンソン）山城に行きました。向こうは八角形と九角形と十二角形が三点セットだったので、もう間違いなくセットだと思っっている訳です。だから国営公園化になった時に、対で復元出さなければ見栄えがいいし、意義もでてくると思うのです。

しかし考古学というのは難しく、日進月歩で十年一昔といえますけれども、なかなか解釈論も違ってきますから、今後、また更に検討していかないといけないと思いましたがね。先生には鞠智城整備検討委員会の一員としてズバリうかがいますが、先生方は箱物、建物を造るのは慎重ですよ。そういったのが、自分たちの責任になるからという事もあるし、批判を浴びたくないという部分がなきにしもあらずで、もうちょっと肝っ玉を太く持つてもいいと思うのですが、先生はどうお考えですか。

その当時の最高の知識を集めて、これこれこういうふうに作りましただけと言えば、それは文句を言う人はいると思うのですが、それはそれで、私はいいと思っておりますし、逆に昔の史跡とか、そういうものは復元をおそれる余りですね、保存ばかりに行っている時がありました。最近、文化庁の中でも考え方が全然違います。「やはり活用しないと文化財ではないよ」という考え方で、例えば重要文化財になった建物があって、それをもう保存しなくてはいけないために、なにも使えないと。だからまあ使うとする。例えば三百円入場料をとって、がらんとした建物を廻る。そうじゃない時代が来ています。

福岡県の中洲に、県の貴賓館という明治時代の建物がありまして、それが今度改装されることになりました。受付に美しいお嬢さんが入りまし、一部を喫茶店にするという事で随分利用の仕方も変わってきております。

こういう史跡関係も単純に保存して築山を見せておけばいいという時代は、もうちよっと違ってきているのでは。やはりそこに来た人が、ある時期のこの建物のイメージをもっていくためにはどういうふうにしたら良いのかなという

事を少し考えながらやっていく時代がきております。いろんな復元手法があります。平面的に見せるという手法、すこし柱だけ立ち上げてまるで椅子みたいになったツールみたいになったものもあります。最近はある意味復元レプリカというんでしょうか、あってもいいと思います。

大田
復元レプリカですね。いい言葉ですね。

小西
あってもいいという時代がきていると思います。

大田
奈良の平城宮跡で、大極殿を復元するなんて絶対にありえないといわれましたが、今復元されています。シャバは変わりましたね、ほんとに。

小西
そうですね。

大田 鞠智城にも柱跡を復元して並べているのですが、ベンチ代わりに座ってほとん

どの方が興味を示さないんです。

小西 そうですね、丁度高さも腰掛けに良いですしね。

大田 建築の先生は、あれで満足されている部分があるし、面白いですね。

小西 その当時として、やっぱり文献が踏み込めない部分が、ここに今あると思っ
ていただいたら良いのではないかと思いますけれども。

大田 私が非常に印象深かったのは、検討委員会の先生も二期の先生ですけれども、
一期の部分の大御所の先生が沢山いらっしやいまして、青森県の三内丸山遺跡
を建物がわからんからやめろ、柱だけにした。という事です。先生方も賛同さ
れてそれが一番いいと言われたのですが、NHKのラジオ番組で一般に馴染ま

小西

ないと。全く一般の大衆と先生方の意識がずれていまして。それが印象深かったです。その遺構というのは地下一m半から二mの下に保存してあるのです。だから想像復元というものに対して守られていて、遺構に影響ないような復元であれば、ある程度造っても良いのではないかと思えます。考え方が変われば、また建て直せば良いのではというような感じがするのです。どうお考えですか。

先程申しましたように、日本の建物というのは木造で放っておけば二〇年か三〇年経てばもとの土に戻ってしまいます。例えば今の知見で一番良い物を造ったとして、それがずっとそうであるという事はなく、新しくどんどん発掘例が出てきて、やっぱりそうだった、であれば保存しておけば良いですし、三〇年後に全く違うどこかで遺構が出てきて、それはもう鞠智城の三〇年前の考え方は間違っていましたよ、となったら、黙って放っておけばその内に二〇年ぐらい経ったら土にもどるので、またその時に考えれば良いのではないかな

と思います。これは私が言ったというよりも、文化庁の元調査官が、そういう事を言った事があります。それは一つの考え方だと思えます。間違つたものを造つても、それはその当時はある考え方をもつて造つたと、それがある時点で違ふと言う事が分つたから、それはそれなりに考え直すということで、私はやっていって良いんだと解釈するようになりました。

大田

やはりテーマパークと違ふところは、本物が土台にあるわけですから、それはそのイメージしたレプリカを造る事は何らおかしい事ではないと私は思うのですが。だから予算的なものを全部兼ね備えれば、やる事は何らおかしい事でもなんでもないと思えますけれども。先生は検討委員会のお立場もありますが、今後、国営公園化を目指して頑張つて行きますので、どうかご理解の程を。応援してください。

小西

こちらこそ。委員の立場で半分、物が塞がったような言い方をしてしまいました

たが、内心はできたら良いなと考えておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

平成20年度第5回館長講座
(平成20年10月12日開催)

『文献からみた古代山城』

【対談】

板楠 和子〔ルーテル学院大学教授〕

大田 幸博〔熊本県立装飾古墳館 館長〕

大田幸博

みなさん、こんにちは。今日は板楠先生の方から『文献からみた古代山城』ということ、大学の講義みたいな感じでございまして、非常に、感銘深いものがございました。実は、板楠先生は、私の高校の先輩と後輩でございまして、日頃お世話になっております。私たちが卒業した高校は体育会系でございまして、二人だけが文化系を進んでおります。

プリントのところを確認をしたいのですが。皆様のパンフレットの三頁です。三頁の五番の「兵士」というところですが、かつて、その徴兵される兵士においては、いろんな準備等が課せられたという事ですが、これは、拡大解釈していくと、普通徴兵されたというか、みんなが兵士という感じだったですね。その徴兵といいますか、ある程度の経済的な余裕というか、そういうところを申請しないと、家族は耐えられないと思うのですが、どうなのでしょう。その辺りから、お願いします。

板楠和子

はい。実は律令国家の核、今で言えば家族ですね、家族の中から成人男性を

軍事訓練する場合、やはり配慮をしています。一家の中から複数同時にとらないように、だいたいその地域で四人に一人ぐらいの割合で集めていくようです。ですから、同じ家族の中から二人も三人もなど、こんな事はとてできません。一つの家族の中で一人か二人出る場合もあるかもしれませんが、ただその人達にはこういう義務が規定上はかけられています。

しかし、今の家族と少し家族の概念も違います。今、家族というと単婚家族ですね。夫婦と子供ですが、当時の家族っていうのは戸籍が残っています、やっぱり二〇人とか三〇人とか、いわゆる大家族なのです。だから、その大家族の中で数人選ばれて同時に行くことがあるかもしれませんが、なるべく、それがかぶらないようにという事が、集める側の軍司とか議長の仕事になっていたのではないかと思えます。

ただ、それにしても、一応、自前で弓矢とか刀とかを揃えて行かねばならないという問題は確かにあります。ただ、律令国家をつくる最中、実は農家とどうか普通の人が蓄えていた武器を一回、後で言えば軍衛にあたると思えます

が、軍の施設に収公するというようなことをやっているのです。だから、後でいえば大公秀吉の刀狩りじゃないですけど、ある程度、何百年かの歴史のなかで、鉄製の武器とか弓矢とかが、そういう大家族の財のなかに貯えられてきたというところはあると思います。そしてそれが自前で装備できるような人からある意味では集める、それが点検して集める側の一つの仕事。やみくもにすべての人を徴収するということでは、特に、すぐに出動しなくてはいけないというような早期の場合は、やっぱり即戦力になるような人達、こういうのが装備できるような人が、律令体制がきちんと整えられる以前というのは、むしろ、こういうものをもって出かけられる人を軍隊として組織していたのではないかと、ということが考えられますし、律令制度が整うとある程度、家族の中に一回こういうのを揃えておくと家族が全員行くわけではないですから、うまく行けば次の人に、傷んだり補充が必要でなければ、使い回しもできるのかなという気は致します。すみません、ここは、私も良く分からないところです。

大田

実は、我々が疑問視していたのですが、万葉集に防人の歌が、九八首載っていると。大伴家持が採用して非常に格式の高い詩が載っていますけれども、私たちは当時の兵士が書けるわけないと、これは大伴家持が書いたかと思っていたのです。そのような人達を選んだということもあるのですかね。

板楠

そうですね。あの東北から徴兵されている人が、そうやって防人に回されたといわれていますが、ここも、大和朝廷の親衛軍として古墳時代から組織されている伝統のある地域ですから、当然ここが武装した兵力というのは急ではなく、やはり前の段階があつて親衛軍に近い形で集められていたのではないかなという解釈もあるくらいです。

ですから、本当に農民が詩を読めたのかというのは、万葉集にいつばい残っているのは不思議な気もしますが、ただ、あの中には国造と言うような肩書きがついていたりして、いわば律令体制が整う以前のこの地域の非常に有力な人物が載っていた感触が、国の造、国造ですから、その国造が自ら率いてくる軍

隊と言うのは、ある程度、武装可能な、こういった武器を携えて来る、そういう徴兵が国造を通じて最初はなされていて、それを国家というのはどういう事かという、間に入れていた人を退かす過程が国家ですよね。国司がそういう有力者によって、国の代理人が直接徴兵や税をやる、それがずっと長い間は、地元の有力者がそれをやっている訳ですから、律令化というのはいわば地元の有力者とのように折り合って、それを国家の機構の中に組み入れていくか、軍隊の組織というものも、律令の規定だけ見ると違和感がありますが、そういう前史がある程度頭に入れると、もう古墳時代に、既にご存じの朝鮮出兵もやっている訳です。その時の武器をどうしていたか。大和朝廷が全部支給していたかという、やはり自前でちゃんと揃えて来た所の軍隊が、海を渡って行った可能性が強いのではないかというふうに思います。ちょっと話がとびましてみません。

大田

東方から連れてきていると言う事に対して、回答の一つとしては、即、兵力と

なるような、そういう資格の人を連れてこなければならなかったので、東方からと言うことを考えられない事もないですよ、単なる親衛隊という事ではないんですよ。

板楠

防人が、ほとんど研究では東国と言うか一番九州からは遠い地域で集められた軍隊ではないかというのは、実は研究の大きなテーマです。私も何回かここでお話した時に、その事に関する説というのを紹介したのではないかと思います。

単純に一つ考えていえる事は、先程、帰還兵の記事を紹介しましたが、そんなに多くはないのですが、帰還兵の出身地を調べてみると、ほとんどが西日本なんです。だから、あの白村江の戦で大敗北をした時に中心になって出陣しているのは、おそらく西日本から動員された兵力ではないかと考えています。あれは大敗北です。敗走して帰ってきて、唐に捕虜になつて連行されてもいますから、西日本のいわば一番兵力になるような男性の人口が、白村江の敗戦後は減った可能性があると思っています。ですから、すぐ、そこからまた西日本が

近いからと言って補充するのは、かなり多くの犠牲者を出している地域に、もうまるで傷の上塗りをするような事ですから、わかりやすい解釈としては、そこが一つあります。

もう一つが、その直後ですから、すぐそこから出動させられないので、遠いけれど、東日本はある意味、無傷だろうから、兵力が残っていれば、遠いけれど、そちらから一度連れて来て、配備する時間さえあれば、そちらの新しい兵力で増強できると言う、そういうのが歴史家の中では一つあります。

西日本に犠牲が多かったから、それに替わる者として東日本から兵を移した。それともう一つ、先程紹介した野田先生などは、防人の意義を、ちょうど文武天皇の時期、敗戦直後より少しずれた時期に、一〇年か二〇年か経っているのに、防人の記述が非常に出てくる。あの頃、実は防人制がほんとに完成しているのではないか。それでは何のために東国からわざわざ兵を連れてきて配備する必要があるのか。対外的な危機感が薄れてきているのにといいことが、さっき紹介しましたように、行政化なのです。西海道という地域をいよいよ本

格的に政治権力・徴兵権力、徴兵権など、全部、律令の国家物資の中に組み込む作業が残る時に、抵抗無くしてそのことが遂行できるかどうか。だから、防人軍は確かに関東や大陸を睨む地域に入ったという前提がありますけど、もしかしたら、九州を領政化するとき、もし事が起ればと、そういう狙いもあったのではないか。

事実、よく鞠智城は隼人の対策のためだという説が出される理由もそこにあると思うのです。やっぱり内乱ですから。あれもはっきり言えば律令制度に反対をする隼人の人達が起している訳です。定着しなさい、一箇所に住んで戸籍を作ります、税を出しなさい。こういう生活が嫌な人達を無理やりそういうふうにするわけですから、だからその時に西日本を抑えるのに、九州を抑えるのに果たして九州の軍隊で良かったか。そういうのを野田先生なんかは非常に強く調されて、やっぱり東国から狙いは大事だけど本当の意味は、実は内乱を抑える意味もあるのではないかと、だから非常に単純には考えられないのではないかと思います。

大田

やはり、奥が深いですね。

板楠

そうですね。やっぱり微妙というか、政治には狙いが、本音と隠されている意図というのがありますので、一方ではほんとに外圧ですよ、唐、新羅の連合軍が侵攻するかもしれない。だけどやっぱりそれがあるから非常に無理難題を地元の人に言う時も内側の事だけ言うとまとまらないし、反抗も起きやすかったのではないかと思います。余りに負担が大きい、なぜ九州だけが何回もこういう負担をしなきゃいけないのかという、それはおそらくはやっぱり共通の敵に似ていますけど、今も盛んにある国はやっておりますが。

大田

それとか海外に求めるとかですね。

板楠

内側で揉めたり指導者に人気が無くなったりすると、どうしても共通の敵を求めなければいけない。やっぱり外圧というのが内政整理の時に、利用されたか

もしれません。

大田

わかりました。同じ三頁ですが、もう一つ、城をやっている人間として、三番の情報の話で、いわゆる守備兵、兵士というのは城を守る事と、城を修復するという役目を持っていたと言う事の話があるのですが、なにか不思議な感じがしますね。

板楠

配備した兵士たちというのは、ただ単に軍事訓練だけをやっているのではなくて、やはり城のメンテナンスに関しても、自分たちで土木工事も動員されていた可能性は高いと思います。こればかりは緊急自体の時はやれないと思いませんけど、普通は訓練、軍事訓練、休暇も取りますが、こういう工事にも動員されるというのが、だいたい兵士に関する条文を読んでいると、訓練と動員でしよるか、二つが仕事だったようです。

大田

ただ、古代山城というのは物凄くでかいですよ。

板楠

そうです。

大田

鞠智城は、東京ドームの十二個分の広さがあるのですが、いったい何人兵士が配備されていたかわからないのです。とうてい出来ないと私は思うのですが。

板楠

つまり、一番私達を知りたいのは、そもそも鞠智城というのは何人の兵士で守るつもりなのか、それとも先程少し紹介しましたように、この下に住んでいる人達を、非常の時は全部ここに収容して、武器を持たせられる人には全部その防備をさせるつもりだったのか、ただ、そのためには実は武器が大量に貯えられている必要がありますね。先の資料ではあまり説明の時間取りませんでしたけど、文武天皇の時は盛んに、よその地域から弓を五百丁とか一千丁とか、軍が作った製品を盛んに大宰府に移しています。だからよそで作った武器で補充

しなければいけないくらい、こちらの軍備が必要で、地元で作るだけでは足りなかったのか。

それとも一つ穿って言えば、先程の話にも関わるのですが、九州では当時、もしかして武器生産を許していなかったかもしれないという説もあるのです。武器生産させないけど、防御はしなければいけない、どうするかというと、よその製品を大宰府に渡して、大宰府から各必要な場所に配布をする。穿った事を言えば、鉄生産を禁止している主旨は確かにあります。古墳時代以来、鉄生産をやっていた可能性が確かにあるのに、その地域に鉄を作るなどはどう言う事かと思うわけですけれども、何を警戒してそういう事をいうのか、やっぱり鉄を使わせないという事は、国家だけがそれを集中管理する、もう一つ言えばここに武器を即渡さない、なにかそういう意味合いもあつたのかなど。記事は断片的ですけれども、疑問をもつて読めば、本当にいろんな不思議なことがでてきます。

軍事力ですね。山城には果たして当初、たった数十人で良いのか、五百人規

模、後の軍団はだいたい五百人を一つの規模にしていますので、五百人くらいを配備しても守りきれない広さではないかと思うので、一つ謎ですね。木簡でも出てきて、そういった支給されていた人数等が書いてあったり、合計何人というような数が出てきたりすると、またそういう細かいことも突き詰めていけるのかなと思っています。

大田

それは有事の際のですね。国家存亡の危機というすごい大きな問題があつて、急遽その古代山城を配置したというふうに言いますけれども、二〇〇%官僚主義で、がんじがらめに縛りをかけて、よく造るなど。矛盾する部分もありますよね。

板楠

そうですね、国家が管理するという事は、律令制は全く今の県庁等のシステムと同じで官僚主義、必要な物品の請求書を出して、初めて許可が下りて支給されるという、非常にそういうややこしいシステムになりますから、よく言え

ば、まさに集中的に中央で管理できるんですけれども、細かく言えば非常にその配分は面倒くさいですね。本来は地元でやれるはずのものを国家が間に入るとそういう大掛かりにはなりませんけど、製品の支配のシステムとしては完全になればなるほど少しややこしい、というのでしょうか。

それ以前は、たぶん地域の豪族達が、ある程度そういう地域の支配権を持っていますから、軍隊組織を作るにしても、食料とか軍備をですね、これも自分達の中である程度やれていたはずだと、私は想定しています。例えば、菊池郡も広いです。菊池郡を呼べば、次には合志郡というこれも古代は非常に広い領域を持っていますので、こちら辺に呼びかけて集めれば集まらないはずは無いと思います。

それと後は、今日触れませんでしたけど、実は馬追う牧「馬牧」がおかれまして、これは国家の管理する牧です。その名残りが、今、二山峠にありますけれど、「二重牧」というのが必ず出てきます。何をやっているかというのと、当然軍馬、そして集める。優秀な馬を育てさせていた可能性があります。もう一

つは連絡用ですね。駅伝の語源、駅馬、伝馬等に配置する。特に二重牧というのは有名でして、一〇〇頭近くを一群れというみたいで義務として育てなくてはいけなくて、それを朝廷とか大宰府に配置する。私なんか鞠智城の位置から何が重要なかと考えて、一つは武器生産と一つはそういう軍馬だと思うのです。馬は二重牧で考えられますので、もう一つの課題はやっぱり武器ですよ。どういうふうに武器を調達していたか。この二つが整わなければ、いくら立て籠もりの城を造っても守れません。そこらへんが研究課題ではないかと思えます。

大田

分りました。なかなか難しいですね。あと六頁の話ですね、二番の一番ですが、それまで、大野城の倉庫に直接米を納税、納めていたのが、一旦、大宰府の方に行つて、それから分配されて来るのだと、その近くの農民が商売できなくなつて、人がいなくなったとご説明いただきましたが、それは、常時、米が大野城にあるという事は、食いぶちを二四穀ですかね、食いぶちを貰うわけですよ。

それをその守備兵が周辺の農民とお金に替えるというか、売ってそういう風なことをやっていたという事ですか。

板楠

基本的には、多分、糧米と出てきますから、食糧の名目で配布されると思いますが、実際当時は、今の様にお金は基本的にはなくて、絹織物とかお米が、実は貨幣の替わりもしています。ですから食糧という名目で分配されたとしても、必ずしも、全てが食糧に消費されたというよりも、米以外の主要な物を手に入れるには、貰ったサラリーにあたる糧米を他の必要な物資と交換するという事です。それで、目ざとい商人が見つけて交換しそうな物を集めていたのかもしれませんが。ここも細かく聞かれると条文のとおりで、私たちも、糧米がくだされていたのではないかくらいにしか、解釈をしていません。鞠智城で出た木簡も、ご存じの通り「秦人忍□(米)五斗」という記述があるわけですから、必ずああいうふうにして、城を造れば何らかの食料という備蓄米をしないと行けない、それは誰か、一般の人が税として納めるというのが当時のシステムで

すから、付札をつけて、何処の某がきちんとお米をこちらに持ってきていますと、それが倉に収められて用済みになった付札が外されていたものが、たまたま運良く池の中に残り、見つかったと思うのです。送り状がここで見つかったのとおりです。だから大野城もそれを応用すれば、帥はちゃんと大野城用で、直接あなたはあそこに持っていきなさいと云われれば、普通は郡の役所、一番自分の近い役所の倉に納めます。それが、郡衙の倉ですね。郡倉とよく言うのですが、あなたは鞠智城にしなさいといわれれば、運んで持って来るまでが多分義務だったと思いますから、白米という事はすぐ使うためです。これが粃となつていると、保存用の可能性が非常に強いのですが。着いてちゃんと届けているという事はすぐに何かしようという目的ではないでしょうか、その他に雑穀も備蓄用としてはあつたと思います。

これは余談ですけど、今、朝鮮半島の南のほうで調査が進んでいる山城からは、稗が多かったと思いますね。稗一穀という単位でやっぱりきちんと納めている木簡が捨てられていて、それが続々と見つかっていて、こちらは今のと

ころ稗じゃなくて米が見つかっています。最初、向こうの方は稗一穀と読まなかつたみたいですけど、日本の研究者が行って、これは単位である一穀と読んだ方が良くと教示をしたみたいで、その後、いろいろ木簡が見つかっていますが、運営するために必要な物は一番食糧ですから、食糧は直接集めるか、ここにあるように、ある時期から大宰府が一旦税として全部納めて、それを更に必要な所に再配分するという、この資料は再配分、大野城の倉じゃなくて一旦大宰府の倉に入ってから貰い受けるので、間が空くんではないか。

いろいろトラブルがおきて、最後は衛卒の糧米が特別に大野城に直接に納めさせてほしいという、これ請求の資料でして、一番最後をお読みになりますと、「勅依請」とありますから、大野城だけは直接納めて良いという許可が出たというふうになっていますので、弊害が色々でたので、具体的には私もわかりませんけれども、やはり自由になるお米がいつも倉にあるのと、時々定期的にか来ないのでは、やっぱり中にいる人にとっては、他の人が寄り付かなくなってしまうというのがあったのでしょうか。すみません、答えにはなりません。

大田

よく意味が分かりました。最初は、なんか横流ししているのではと思ったのですが、そういうふうな正当な行為ですね。分りました。

板桶

横流しもあつたかもしれません。

大田

それで、六頁の最後の所で、いわゆる七世紀後半に、鞠智城が歴史の舞台から姿を消しますけれど、怪奇現象というのがずいぶん出てきますよね。これが一部私たちの古い解釈では、公的な政府機関というものは、最後は規律が緩んでいって色々な不正も起きたのではないかと。だからそういった不動倉からの米の収奪、奪ったのもあつたのではないかと、そういった不正をごまかすために、怪奇現象を大宰府を通じて政府に報告して、ごまかしたのではないかと思つたのですが。

今日の解釈では、逆に警告ではないかとおっしゃいましたよね。非常にそういうところは斬新なお話でしたが、もう一回これを確認したいのですが。

はい。資料の流れの中で紹介しましたとおり、鞠智城だけでそういう現象が起きているのではなくて、他にも例があるということをご紹介致しました。それと、この中では三番目の『文徳実録』天安二年の最後の所に「鞠智城の不動倉が十一宇火つけり」、焼けたというわけです。今、館長のほうから指摘がありました。実は律令制が緩み始めると、米倉が焼けるという記事が出てきました、しかも、それを担当者は神がなせる技というように報告をしたりする例が確かにでてきます。ご存じのとおり、鞠智城のこの一帯からは非常に「焼米」が炭化した状態で出てきていますので、空っぽの倉を隠すために役人が自ら火を放って焼いておきながらですね。神とか雷が落ちてどうしようもなく焼けましたとか、要するに帳簿とつき合わせて困るような事態というのは、律令が緩むと、倉で物を管理するというのは一番起こりやすい事ですよ。帳面では全部揃っているはずなのに、交替した次の国司が倉を開けてみると、実は、あるはずの物が全然中に無いとか、もう汚れていたり傷んでいたり、きちんと規定の数を整理して棚に置いておかないといけない物が無いとか、武器もそうです

し、米倉もそうです。中を使つてしまつて空だったり、さぼつてそういう仕事をしていない役人達は困ります。一番いいのは証拠隠滅です。全部無くしちゃうのです。ただ、これが機能していた証拠は、後に、例えば平将門が反乱おこした時は何をやったかという、最初に襲撃する場所は郡衙とか国府ですよ。藤原純友を大宰府まで行つて襲撃したのは何のためか、つまり米倉と武器倉を狙っているのです。ですから、それさえ盗れば火をつけます。それを盗らずに火をつける事はまず有り得ない。放火略奪と良く言いますけれども、狙われやすいのは、日本の歴史の中で米中心経済の中で、お金持ちのシンボルの場所、倉です。倉こそは財がある証拠ですから、鞠智城なんかも空っぽになつていたかもしれませんけれども。ただし、先程、例で紹介しましたけれども、この頃は非常に新羅の脅威が迫つていた事も事実ですから、そのために舞台装置として警告の為に使われた可能性があるので、中が満杯だったかどうかは、大田さんがおっしゃつたとおり、非常に疑問があります。

規定通りに真面目に傷んだものは修理して、足りない物は新築してというの

が、国司の役人の義務です。だけどそれをちゃんとやっていたかどうかまでは資料が見つからないと証明できないと思います。よろしいでしょうか。

大田

ありがとうございます。今日はせっかく古代史専門の先生をお招きしていますから、お聞きしたいのですが、二頁で『続日本紀』で見る文武天皇の時代というふうに羅列してあります。古代史に限らず歴史は勝った者を列記しあうと良く云われます。『続日本紀』あたりの六国史の記述内容を見る場合でも、やはりお城などは、私も中世城をやっていますが、城は軍事機密的な物で、隠すような場合があるのですが、古代史のこういった『続日本紀』あたりの列記する中にやはり、先生が一回お話したときにお城について分らないとおっしゃったのですが、それとこの辺りの所をお話したいと思いますが。

板楠

『続日本紀』というのは律令政府自らが資料を集めて編纂させています。ですから当然当時の支配者であった畿内にいたその政府、しかも天皇を中心とする

政府が、自分たちを中心に編んだと言う大きな前提はあります。ですが、そこでとられている、極めてその政治状況的な事務的記事、これはもう年代順に起きた事とか、あまりその手を加える必要が無いものだと思います。しかし、私達が知りたい事や重要だと思ふ事が網羅されているかどうかとは、今、言いましたとおり、当時の政治家や天皇を中心とする政府にとって重要な事柄が選ばれているはずですから、私たちが特に知りたいこの古代山城の事とかというのは、ほとんど肝心の中身には触れていない。という事は、一つには実践で使われる事が無かったからということもあります。それともう一つは、軍事上の問題ですから、中の細かな配置の人数とかどうやっていたかとか、武器がどれくらいあるとか、多分それは軍事上公表する事は出来なかつた事だと思ひます。もしかししたら、兵務省の役所の中には、そういう記録が保管されていたかもしれません。運が良ければ平城京の発掘調査で、兵務省関係でそういった今までほとんど分つていなかった山城関係の重要な報告書が運良く残つていればと言う淡い期待はあります。が、今のところは本当にどんなに探しても、実

践に使われなかった事も一つはあって、殆ど肝心なことが、こういうふうになんなに分厚くしてみても、お城の名前くらいはわかるんです。郡がある程度推定つきます。実物ですから、城は動かせませんから場所が大体突きとめられてはいますけど、場所だつて、これはほとんど考古学的な調査で確認されていて、鞠智城もご存じの通りです。

最初はどこかという事から想定をして、調査は考古学的な結果に委ねられてほぼ間違いが無いという結論を出したくらいですから、本当に知りたい事を一生懸命探していますが、限りある資料の中からこちらが知りたい情報ってなかなか見つけれられないんですね。ただし、これから先期待が持てるのが、今迄は国史・風土記・万葉集、古代史研究する時はテキストが決まっています。決まっているという事は、ある程度、楽は楽ですね。それが基本ですから。近世とか近代のように続々目を通していない文書があつて何が出てくるか分からないという状況ではないのですが、今、古代史は、地下から考古学的な調査で、本当に地下の中から一等資料が発見される可能性が残されています。これがいわ

ゆるここでも見つかっている木簡の意義なのです。ほんとにこれもつい十年前です。平城京の発掘調査、雪の降る寒い日に、ゴミ溜めのような土溝の中に土の塊が見つかって、その泥を落とした時、初めて字が見えた人は驚いたと思います。しかし、行き詰まっていた古代史の研究に、本当に大きな風穴を開けたのがその時の木簡です。お城だから平城京だから出たのではなくて、今、もうそれが全国の発掘現場から出土しています。何処でも使っていたはずなのです。ただ条件が整はなければ、木の札ですからすぐに腐ってなくなる。これが残るのは奇跡的なのです。

鞠智城で一片だけ見つかったというのも水分のある池の底だから見つかったのであって、これがカラカラのところは捨ててあつたら絶対残ってはいないですよね。だから木簡と言うのは役所では必ず使っていたはず。紙が稀少だったので、実は紙の代わりに今私達がこうやってメモ代わりに使うのが全部木簡でしたから、膨大な量があつたんですが、それが運良く廃棄されて場所に水分があつて、調査で日の目を見れば古代史の研究というのはいかに進むと思いま

す。だから木簡を専門に研究する研究者、それと土器に書かれている文字、墨書土器、刻書土器と言います。この文字を頼りに地方史を地方の社会の姿を研究しようという研究者が、今、もう出てきています。若い世代の人達が、やっぱりその地域に出てきたと思います。本当に行き詰まっていた資料を打開する、もうこの鞠智城の木簡も本当に今一片だけですけれど、そういう意味ではまさに一等資料です。嘘はつかない。当時の実際使われていた行政文書ですから、是非、皆様方も期待していただきたいと思えます。今はわかりませんが、五年先、十年先、この調査が進んで池が総ざらえになるかどうか分かりませんが、あそこにまだ何か埋まっている事、期待している者の一人です。

大田

今、先生がおっしゃった事は、ほんとに最初と最後が出てくるだけで、真ん中が何にも無いのですよね。それを補うのが発掘調査と言うのですよね。

板楠

そうです。今、期待できるのは発掘調査。だから記録で初めて出てくるその前

の段階もそうです。もう木簡が使われていますから、もしかしたら修理記事じゃなくて、修理と言う事はその前に造られていれば、当然そこで何らかの行政的なやりとりがやられていれば、木簡を使っている可能性があります。こういう広い場所で、やはり街中の込みいった所は全面発掘できませんので、なかなかそういう資料がありそうだなと思っても、人様のお家の床下を掘るわけにはいかないのです、ただその例として今、JRの近くの二本木は再開発で全面調査していて期待していますけど、ほんとは河川の流域だから、木簡の残りは良いはずなんですけどね。だから鞠智城は山の上ですけど池が造られている事が分っていますので、条件さえ良ければ、水分のある所に捨ててあれば、可能性は残っているのではないかと思います。

大田

まあ、しかし、狙って出ないのが考古学でございまして、なかなか出ないのです。先生、全く比較するのはおかしいと思うんですけど、宇城市の不知火町にキリシタン研究家の鶴田さんという方がおられるのですけど、その方が言うに

板楠

は、もう国内の文献には限りがあると。後はその当時、宣教師が本国とやり取りした書簡などに沢山資料が眠っていると、やっぱり向こうの本国に行って研究しなきゃいかんと言うんですよね。古代史の場合にも、その国内資料は限られていると思うのですが、中国とか向こうの方の文献にも限りがあるんでしょう。そのあたりどうでしょうか。

はい。文字の記録が始まったのはご存じの通り中国ですから、中国の王朝は自分の王朝の正当性を証明するために、必ず新王朝ができると自分の歴史を、こういうふうになったと正当性主張の証明の為に残します。それと中国のああいふ大帝国を築いた皇帝は、周囲の国が皇帝に朝貢に来ることを非常に好んで厚遇します。そして必ず記録します。つまり今、倭の五王が、日本の記録で、讚、珍、濟、興、武と言うのが出てきているのも、中国の奏王朝の記録でして、向こうが朝貢に来てくれて興味があれば必ず残しますし、卑弥呼の事が中国の実は文献でしか残っていないと言うのもご存じだと思います。改めて言いますけれど

も、日本の記録には一切残ってはいないのです。中国の三国時代の魏の歴史書の中に不思議な事に残っている。なぜかというと卑弥呼は、他の事で有名ですけれども、シャーマンとかそっちの方が有名ですけど、私が凄いと思うのは中国の王朝の動乱を捉えて実は遣使を派遣しているんです。ただ好きな時に出生しているわけではないのです。わざわざこちらから使いを出す時に、ちゃんとグッドタイミングを捉えて出していると言うところが、どうやってその情報を手に入れたのかと言うくらいに。今のよう便利な時代じゃない時に卑弥呼は確実に外交状況を捉えて、こちらにとって必要な使いを出しますから、向こうもそれを受けてちゃんと金印を与えたとかです。ね銅鏡を渡したとか、向こうの皇帝が直々にそういう待遇を与えてから記録を残す、つまり断片的ですけども、こちらとの外交交渉で向こうに必要な記事は残ります。

後は朝鮮半島ですよ、高句麗王、大王時分「倭」という、日本の事は倭です。あんまり良い意味ではないことはご存知だと思います。倭という言葉は中国で作った文字ですけど、背が低くとか良く言わない時に使う、ただ人片が使っ

てありますからまだ良いですよ。中国は周りの国はみんな獣片ですから、獣に火で北狄（ほくてき）、南の野蛮人で南蛮（なんばん）、西の戎で西戎（せいじゅう）、東の夷で東夷（とうい）。蝦夷の字になんと律令国家がそれを真似して使ったりしますよね、まさに文字の国ですから、文字で、そう一字で政策をパツとあらわしたり、一応倭人の、小さいという字みたいですけど、それで興味があれば全部倭国伝とか倭の情報として残っています。あと朝鮮関係ですね、朝鮮では『三国史記』とかが古代の資料ですが、ただし、作られた時期が後という大きな問題があります。ですからほんとに自己中心的です。自分の王朝中心で書きますから、日本軍の事はその時々で、やっぱり関係があつたり問題があつたりする時にチヨコチヨコ出ているんですね。

実は、私も日本史が専門なんですけど、古代史をやる以上、大田さんご指摘の通りアジアの中で日本を位置づけなければいけない。日本の文明の基礎は皆、漢字を使っていますよね。これも日本人は何も疑問を持ちませんけど、はっきり言えば外国の文字ですよ。なのに、日本人はまるで自分のものの様に使い

こなしカタカナや平仮名もこれから作っている訳ですけど、よく見たらこれ、韓王朝の漢字、それを日本人は嫌がらない、でも韓国、御存知ですよ。あそこも漢字の国です。だから古代史をやるのは、実は、この文献共通です。だけど今ご存知の通り、韓国はこれを嫌って、漢字はよその文字だからハンゲルを国の文字にしているのです。日本人はある意味でそこまで厳密と言うか過去の事にこだわらない、非常におおらかな民族だと思っております、だけど中国も無視できませんし、韓国も無視できませんので、私は古代史をやっている以上、『日本書紀』中心にしていますけど、できるだけ情報を集めますし、今年の夏も韓国の全州（ちよんじゆ）で合同学会があり、九州考古学会と向こうの嶺南考古学会の合同学会が二年に一回、お互い交替でやっています、私も実は日本人なのにどういいうわけか、一回目から厚かましくも参加しているという、それはやはり今までどうしてもちよっと国の事情で、研究が遅れていた韓国の古代史や考古学会が、最近この十年ぐらいに、ものすごく調査が進んできて、あつと驚くような成果が発表されつつあるんですね。日本ではちよつとなかなか生

では見れないもんですから、私なんか専門外であるにもかかわらず、ご同行させてもらいました。

ホテルを新羅の都、慶州というのは、今回、私が泊まらせていただいたホテルの向こうに山があるんです。その丘に実は漢字で書くと「名勝城」という山城があります。あんまりそれは記憶にない方が多いかと思いますが、実はこれが韓国側の『新羅本紀』の中に「倭人が攻め込んだ」と出てくる城なんですよ。あんまり観光コースに入ってなくて、ただ地図には入れてありましたので、時間を見て実は一人で行けるとこまでどうなっているか分かりませんが。元のガイドさんもあんまりいわゆる有名な観光地じゃないものですから、行くかどうか分かりませんとおっしゃったんですよ、いけるとこまで行きますと言って名勝城なるところまで行きました。何故かと言うと断片的ですけど、むこうの記録に倭人が攻め込んだ城が「名勝城」と書いてあるんですね。だからこういう場所かなと思って行きましたら、新羅の後の新羅の王宮の目と鼻の先の山の上なんです。こんなところまでほんとに倭人が攻め込んだのかと

思つて、勝手にいろいろ想像しながら、古代史ですけど御紹介がありましたよ

うに私も一応、勉強してはおります。

大田

先般、木崎館長とも一緒に、七月に韓国に行きました。日本海の事を堂々と東海というふう書いてありましたね、案内板に。外国に行くとは日本の違った側面が見えるという事があります。それからハンゲル文字ですね。今になつてやっぱり韓国政府も反省しているようです。古代史の勉強が出来ないそうです、研究が。だから慌ててやっぱり今、漢字の勉強をはじめるといふような話もあります。そういうことで、今日は、色々な面で先生のお話をうかがいましたけれども、大変参考になりました。ありがとうございます。

平成21年度第1回館長講座

(平成21年6月14日開催)

『百済の仏像』

【対談】

大西 修也〔九州大学名誉教授〕

大田 幸博〔熊本県立装飾古墳館館長〕

大田幸博

過去二年半におきましては、西日本の古代山城を廻り、ビデオに納め、それを編集して調査員を招いて生の声を聞いてきました。今年度からは、新しい企画を計画したところでございます。今回は大西先生をお招きして百済の仏像に関して詳しくお話をうかがいました。

専門的な事は、今、先生からお話いただきましたので、私としましては専門外でございまして中には踏み込みませんが、鞠智城との関連につきまして、先生に、若干、質問させていただきます。

非常に意外な事でしたが、私達は先生から今日、お話をうかがうまで、一〇cm未満の仏像に柄(ぼぞ)が付いているのは、何らかの小型の厨子に入れて持ち運んだり、そういったものに入れて保管していたという印象が強くなりました。今、仏像は、京都にクリーニングに出しておりますが、今後の展示方法は、意外と柄を切ってしまうって普段持っていたというようなことでよろしいでしょうか。

大西修也

鹿児島の場合ですと、これは立てるといふことの主旨のための柄です。そうすると当然、受けとなるべき台座がなければいけません。上が蓮華の花のような形になっていけば、下の反る蓮華みたいな台座で差せばよいのです。

けれども、蓮肉という蓮の中央部分のような受座の部分、その下に蓮華の花のようなものがあればよいのですが、その台座の形がどうなのか。

仮に私が推測しているように、築城に百済の人などが関わっていて、指導するためやって来ます。その人が本国からわざわざ日本に来るわけですから、自分が信仰している仏を持って来ます。その際、台座まで全部となると大荷物になります。だから御本尊だけを大事に何かに包んで肌身離さず持つて来る。

柄を切るといふのは鹿児島ではたまたま伝製品といいますが、人から人へ集落で伝えてきたがゆえに、安置するための柄だとすると、木などで台を作つてそこに穴をあけて立てる形で展示をしているところもあります。ですから本来の立てるための柄ですから、その受けというのがある形で展示でもいいですが、そうするとさし込むことによつて見えなくなつてきます。そうすると「本

来あるホゾの状態で出ました」という形が見られるような斜めの置き方で構わないのではないかと思います。

大田

この調査の過程で研究者の方々にお話をうかがいましたが、熊本県立美術館の有木参事が、確実に出土地点が押えられるということは価値があると申しましたが、その点を当たり前のことですが、先生におうかがいしたいと思います。

大西

私も状態は別にして、明らかに百済で造られたとする仏像が、しかも対馬の金田城をはじめとして築城の時期に符合する、そして百済との関係が指摘されるような時期に鞠智城からも出てきた。百済の仏像と思われるものが出てきた。場所もはつきりしている。仏像などの資料的な価値として、明らかに出土地がわかるということは一級資料です。

ただ、私の知っている例ですと、とてつもない所からも出てきます。今の平壤で作られたと思われる大変古い仏像が、韓半島の南から出てくるのです。寺

跡でもない、道路のわきの溝のようなどころから出るのです。みんな不思議が
るのですが、でもその理由が後に聞き取り調査である程度分ってきました。それ
はちょうど朝鮮動乱の時に、朝鮮の軍がそこに駐屯していたという聞き取り調
査がでてきます。すると兵士が仏像を持って韓国まで攻めて来た時に、何らか
の理由で急に撤退しなくてはならなくなった。その時に仏像をそのまま残して
いったというような形ではないかという気もします。やはり兵士にしてみれば
自分の信仰しているものを自分の道具と一緒に持ち歩くというのは、持仏とし
ての本来の性格、ただ僕は有木さんがおっしゃる出土地点が確認できるという
事は資料としては一級の価値があると、ましてや築城と百済との関係を考えた
時に、そこに百済の資料が出てきたという事はなんと幸せな事だと、そう理解
しています。

大田

『日本書紀』の天智四（六六五）年の記事に、大野城、基肆城もそうですけれど、
憶礼福留（おくらいふくりゆう）や四比福夫（しいふくふ）、向こうの達率（たつそつ）

での技術指導で造ったと書いてあります。それが鞠智城の場合には『続日本紀』で大野城、基肆城と一緒に修理したという記事が初めて出てきます。今回出土した百済菩薩が、鞠智城の築城にも関連する貴重なものとして喜んでおるわけですが、百済仏につきましては先生の検証からしますと、だいたい七世紀後半といえますから西暦六六〇年代といえます。その前後、鞠智城の推定年代といえますか、大野城あたりが築城された時期、そういったものと被ってくることは事実ですね。

大西

それでいいと思います。宝珠捧持形ではございませんが、ソウルの山陽洞というところから出ている彫刻としてのスタイルというのは、非常によく似たものがございます。例えば下の裳と言われる襜の折り畳みが非常に今回のものとよく似ておりますし、我々がいう三国時代末、百済であれば百済末と考えていいわけです。

先程いいましたように、百済系の移民が新羅の時代になっても地方の官職を

貫いながら新羅の時代に生きて、自分たちが信仰していた百済の仏をその当時の仏として彫っているという例がいくつか出ています。ですから当然、新羅時代初期に渡っていてもそれは構わないわけです。では、日本に来るきっかけと、いうことを考えると、やはり築城の時期に合わせるとというのが、むしろ自然な考え方ではないかと思えます。

大田

当然のことながら、念持仏を一般の渡来人が持っている可能性は当時としては有り得ないですね。やはり達率というか高官の人が持ち込んだと考える方が自然でしょうか。

大西

それは、はっきりとは分らないことなのかも知れません。日本でもそうですし、やはりその当時の社会として鑄造の仏像を手に入れたり、あるいはそれを持つことができるというのは本当に限られた人間になるわけです。当然そういう築城の技術をもったような百済においても高位のもの。築城に関わる工人であっ

でも、それは構わないと思います。

山城は山の中にあつて長期戦に備えるお城ですから、水利をどう探し出すかということが築城には最も欠かせないのです。だからそういう地形を見る事ができる技術者、これが築城の技術に最も必要な事です。それがたまたま鞠智城で貯水池と思われる場所から出て来たというのも何かの因縁かと思います。

大田

皆様に御報告しますが、この仏像は、貯水池の一番底から出土しました。途中の堆積物がなく一番底から出ているので、鞠智城の築城との関連というのが非常に強くうかがわれる点もここで強調しておきます。

出てきた時の場所を示す図ですが、ちょうど米原集落の西側の谷間で、五三〇〇mの広さがあります。平成三年に韓国の京畿道の二聖（イソン）山城から八角形が出て来ましたので、今日おいでの古閑名誉会長とも当時一緒に行きまして、その時に漢陽大学のキム・ビヨンモ教授が「きっと鞠智城にも池跡がある」というふうに言われましたので、私達も先生を招聘しましたら「こ

こだろう」とおっしゃった場所、ズバリでした。そこから出てきたのです。

これが今、現在の状況の一番いい写真です。手前が堀切門といいまして、崖線があり比高差三〇m位の崖面であります。米原側にのぼりますと平地ですが、一端、菊池市側の堀切に下がりますと大変な城塞です。

ちょうど池尻近くの方から出ており、谷頭の方に貯木場跡といえますか建築用材が出て来た場所があり、この池尻の方から出てきております。

先般、NHKが取材にきまして、七月二十六日の教育テレビで一〇時から一時間半『大宰府と鞠智城の古代山城、国家成立』について放映を致します。取材の中で、この仏像を掘った作業員の方に「どうですか。興奮されましたか」と質問がありました。作業員の方は「私はボルトかと思いましたが」と答えていました。非常に名言だと思えます。横になって寝ておられますので、百済に帰れなくなった高官が意図的に池に安置したのではないかというような事もいつております。

これが出てきたばかりの所で私が撮影したものでございます。唯一、出てき

た直後の写真となつてしまいましたが、土砂が付いて錆だらけでした。調査員

の矢野君も念持仏のようにポケットに入れて持ってまいりました。

これが今、京都でクリーニングしている仏像です。かなり綺麗になつて真ん中の痩せ型のカーブの線が出て、背面の裏側の所も少し出ております。

先生、これをご覧になつて解説をお願いいたします。

大西

先程も申し上げたのですが、これのもう一つの特徴は、普通ですと後頭部のところに穴が開いている、つまり柄を差し込んである穴が開いています。あるいは、背中はこの辺の部分にそういうものがあつてもおかしくないのですが、この場合にはそれらしきものは私の見ている限りありませんでした。ですからあるいは台があつて、その台のほうにもう少し立派な物があつて、別にこの仏像の為の支柱があつて、そのための光背が付いていたという可能性もあります。ここにはでていません。その特徴が裳を大きく折りたたんで、天衣が下つてぐるつと巻くようにしながら台座の所に入つて、あるいはちよつと垂れるような

ものも出てきます。台座の蓮の所にこう巻いています。こちらが欠けているということになります。それから考えられるのは、この部分に実は真ん中の裳を縛った紐が二本くらいあって、真ん中に垂れ、確か僕が前に確認したときは指先があつて、ここのとこにその紐が垂れてここまで出てきていたのです。

一つ分りませんのは、天衣があつて、腕のここが条帛といっているのです。条帛が裾の方に垂れる事があります。肩を覆ってきた物が一度、肘のあたりを通つて、右肩を覆ってきた物は左へ、左肩を覆ってきた物は一度下に下がつてから右へという形が普通多いです。ところがこの仏像の場合、いま見ている限りでは、どうも腕の内側から外に通つてるんじゃないかなという気がします。これは日本でも白鳳時代末とか、あるいは新羅でも百済末くらいの頃のところに、例は多くないのですが出てきます。ですから僕も直接、今の状態で見えてみませんので、そこを読み取りたいなと思ひますが、現状から言いますと内側から下にすらすらと落ちるスタイルをとっていると。その辺から考えても百済末ではないかなという、そういう特徴も読み取れます。

大田

今、クリーニングをしております。レプリカも造り、仏像が熊本県に帰ってきますので、その際には改めて公開をしまして、皆様方にご覧いただきたいと思っております。

私はこの調査の三代目で、いま五代目が調査しておりますが、国土交通省の調査官が来ました時、国営公園化を「頼むばいた」と言いましたら、「何か大きな発見があるならですな」というふうに言いました。それは絶対出ないということを条件に発言しておりました。ところが出てきたわけです。それで勇んで先日のことを言いましたところ「フニャフニャフニャ」とごまかしましたので、今日は先生、本当に県民皆様方も先生の専門的な見解でもってピシッとこの仏像の意義をお話願いたいと思います。

これは韓国の仏像に近いのではないか、と言い出しましたのは古閑名誉館長でございます。姉妹都市である韓国の忠清南道にすぐ電話をいれ、向うから逆に「九州に大西先生がいらっしゃる、そこに聞け」と指示があり、お話に行つたわけでございます。文化庁に行きましても調査官ははっきりとわからなかつ

たのです。それで沢山仏像の本を持って来まして「日本にはなか」というくらいに言われました。先生、最後にもう一回その意義をお願いします。

大西

確かに文化庁の調査官でも大西がこう言ったといったら「いやそれは」というのはいいかと思えますし、百済の方からも異議が出てくる事も多分ないと思います。それともう一つ、何もそれを見越して言っているわけじゃないんですけれども、先程も言いましたけれど、銅の成分を調査したら、これは日本製だと出てくるかとそんなことはありません。ですからそれはもう物を見てこれが百済だ、しかももっとプレスタイルのもの、当初のスタイルを維持して来た仏像である。これは百済末期の特徴でもありますので、むしろ末期に作られたものが古いスタイルを持っている。それは全部を壊されたから何らかの資料によつて当初のもの、宝珠棒持釈迦三尊像みたいな物をみんな作っているというのはまさにそうです。作られた時代とスタイルと違う。だから古いスタイルのものが百済末期あるいは新羅になって出てくるというのはそういう特徴ですか

ら、持っているという事から考えても当然これは百済系の人間が造った、と言えるのではないかなと思います。だからそれを見たらあの大きさとか状態は別にして百済との関係が指摘されている山城の遺跡からそういう遺物が発見されたという意味は、やはりこの鞠智城の築城に百済系の山城技術が関わっていた、あるいは時代から言っても七世紀後半の山城にそういう技術が、この御当地にもたらされたということを百済系の瓦や仏像が出た事によってむしろ実証される、関連性が評価される、という意義について、この仏が見つかった事の意味は大きいものです。だから善光寺如来のお告げじゃないですけど、やはり仏さんは百済との因縁が強い場所であると思われて、今、現れたのかも知れません。

大田

ありがとうございます。国営公園化に向けて頑張っていきたいと思えます。まずその前に特別史跡を取る予定でございます。

平成二十一年度で調査が三十一次を迎えますが、大体ほぼ十年ペースでポ

ツポツと重要な発見をしております。百済系の瓦とか貯水池とか木簡とかですね。今回は仏像でございます。今度の発見は十年後位だと思っておりますのでこの機会を逃さずにやっ行って行こうと思えます。先生、本当にありがとうございます。またよろしくお願いします。

平成21年度第4回館長講座

(平成21年9月13日開催)

『古代西日本の朝鮮式山城』

【対談】

小田富士雄〔福岡大学名誉教授〕

大田 幸博〔熊本県立装飾古墳館館長〕

大田幸博 こんにちは。今より対談を始めたいと思います。今日、小田先生から、最新情

報を盛り込んだお話をたくさんうかがいました。いろいろな所を見て来られていたので、たいそう勉強になりました。よろしく願います。

小田富士雄 よろしく願います。

大田 古代山城の機能面を重要視した際、構造的なものはさることながら、大野城を

中心とした都城を取り巻くシステム、それから屋嶋城を中心とした官道という見方ができます。繰り返しになりますが、まとめてよろしく願います。

小田 山城を取り上げてお話しするときには、城単位で見ると、構造はだいたい

同じようなものだとお話しています。その中で共通点とか、相違点が出る、という見方をしています。特例として都城と都城制を構成、その中に組み込まれた山城という見方があり、北の都城ラインには大野城、南のラインには基肄城

が組み込まれています。大野城、基肆城は単独で何かをするのではなく、大宰府の護衛を目的にしています。最前線の金田城、瀬戸内の屋嶋城、近畿の入口にある高安城、見張りや連絡を取り扱う中継基地的な山城は単独の城と考えています。鞠智城は単独で構成されており、平地の丘陵山城であり、かつ大宰府への兵が駐屯したということも考えられますし、倉庫や米倉跡が発見されています。広域説があり、水田などがあり、自給自足の機能を持った城、他の単独の城とは種類が違う。

他の城は高い山にあり、見晴らしの良い山の上にあるのに、新羅や百済の山城の場合、例えば百済の扶蘇山城、新羅の半月城などは、ある時期、王宮として使われたケースがあります。在城といいますが、王がある期間、山城の中にある建物で生活する状態のことを言います。実際「在城」という銘の瓦が新羅から出ています。朝鮮では王都に都城型のお城があるのですが、日本にはありません。

住民が収容できるが、この場合、高地性では無理なので、羅城と呼ばれるも

ので囲んでしまう。中国では城と郭に分け、合わせて城郭といえます。内城は内部の宮廷、宮城など王がいるところを含めて内城と表し、外側が外城、一般の人たちが生活するところ、そしてその外側を大きく羅城で囲みます。これは中国の場合ですが、朝鮮や日本の場合では形を変え城が存在します。元の形式がそのままストレートに伝わるわけは無く、国々で、基本的にあつたものは残し、新しく取り入れたりして、少しずつ変化して伝わっていきます。共通点、相違点があるのもそのためです。いわば民族性の違いから来るものでしょう。

大田

大宰府を中心として、都城と単独城があるなら、その中に鞠智城はあります。低地にある利便性に違いがあると、資料十一頁の地図に書かれています。国指定されたところは内城地と呼ばれる場所です。外側の外縁地区というのは丘陵地の縁でもっと広がっていくと、広域のラインがあり、外側に外郭線で、中世城の木野城が土塁線の一部を利用しており、外縁地区の左上に水田があり、これを取り込んでいるのだ、というのが、先達の先生方の意見でございます。

水田や貯水池から出ました木製品の農耕具から、水田に変わっていったと考え
てよろしいでしょうか。

小田

一時期、先達の方々は狭域説と広域説として考えようとしていました。狭域は
内城、外城範囲で、広域は外城の倍近い面積になり、土塁線も取り込んで広く
考えよう、と二つの考え方がありました。中枢は内城にあり、広域説の場合は
内部に水田地区を取り込む、ある程度人民は入ります。自給自足の生活ができ
ますので籠城型の機能も果たせるということになります。

大田

私は昭和六十三年からこの鞠智城で調査をしています。土塁線をずっと辿っ
ていく広域説を唱えているのですが、文化庁から城壁がつかっていないと話
があり、指定を受けるなら囲いが無ければということ、土塁線と崖面、囲い
込まれる内城面とで提出して国指定を受けた、という経緯です。内城地区をA、
外縁地区をB、土塁線の推定ラインをCというランク分けでよいですか。

小田

現在、国指定に関しては、中枢部はどこか、広く考えたらどこか、ランク付けは必要で、特に古代、普通お城というところをすべて囲まれた状態と考えます。しかし、古代山城は地形をそのまま利用しています。神籠石の場合、低いほうの水田に向かって土塁を造っているのですが、頂上付近は自然そのままの城塞です。山まかせで後ろの方から攻められることは無いのでいいのです。何も手を付けず地形を最大限利用するのが共通点です。しかし、文化庁などは囲いがつきりとしていないから指定はだめだといいます。大宰府の羅城説の場合、東側には土塁がありません。それは本土に繋がる、あるいは朝倉宮に繋がる道筋なので内府と考えられるので羅城としては造る必要がないといえます。

大田

先生のお話によると、内城地区は一周三五〇〇mくらいあって、鬼ノ城と同じ内城は横並びします。大宰府を中心とする大野城は六五〇〇mくらいです。そういう意味で内城地区というのは非常に狭いのです。周りの土塁線を入れても良いのではないか、という考え方もありますが、外側の防衛ラインに当たると

ころ以外はまだ発掘していないのでわからないのですが、周辺も発掘調査の必要はありますか。

小田

狭域説にあつては、内城とか外城などしつかり調査が進んでいますが、広域説においては調査不足で課題が残っています。これらの考え方を否定するにも肯定するにも説得する論拠が足りません。

韓国の扶蘇の羅城の図面があります。ひとつに西側土塁、南側土塁と示してありますが、推定で付けられています。その後、調査してみました。人為的なものはなく、逆に自然の丘陵の流れをそのまま取り入れ、考えられたのではないかと。さらに、錦江（白馬江）の規模をもっと重視すべきであると韓国側から出ています。その中でも手を加えたような痕跡がなくても自然の地形を絡めて利用するという考えが最近出はじめました。広域説を唱える人たちにとっては心強いものとなっています。

ここに白馬江が、西側と南側が水で囲まれていて、川と都城制の組み合わせ、

大宰府と水城のライン、水城の外に幅六〇mの堀を設けていたという発想にながっていくものと思われます。

大田 この鞠智城でも防人が自給自足していました。

小田 ここで食糧自給もされていたのでしょう。広域説をはっきりしないといけません。緊急時に周辺住民がここに避難してくることも考えられます。大野城や基肄城などの険しい山に住民が逃げ込んでくるかどうかは疑問です。

大田 鞠智城は単独グループ、平地型、広域説で唱えられているものとする、大野城や基肄城と違った城と捉えてよいでしょうか。

小田 大野城・基肄城は都城制、鞠智城は単独城で成り立ち低地である、屋嶋城・金田城とも違う。これらはすべて高地性で、鞠智城だけが低地性です。単独の城

は、城だけで郭はない、しかし、ここは城も郭も考えられます。

韓半島の山城には大野城型、鞠智城型があります。その中の百済タイプは単独城を鞠智城は採用したということです。大野城や基肄城のような都城型城は百済にあります。

大田

鞠智城は国防の最先端基地であって、薩摩隼人の対策をしていた、という説があります。

小田

鞠智城は国防の最先端基地であった、という説は以前からありました。その他にも有明海からの大宰府攻撃を防ぐ目的で造られたという説もあります。鞠智城には政庁跡も見つかっています。では、肥後の国には政庁はふたつあるのか、ということになります。国府とこの鞠智城。隼人対策であるなら、国府より南でなければ意味がありません。

もう一つに、資料1に「六九九年 大宰府をして三野、稻積の二城を修らし

む」とありますが、二城を修繕したということです。三野は今の宮崎県の西都のあたりに、稲積は鹿児島の大隈半島の国分市あたりにあります。この二城で隼人に対しては十分にできます。私は、隼人対策の城ではないと思います。

大田 熊本県では管理棟の建物と位置づけています。

小田 大田先生がおっしゃるように、古代山城で考えようという事で良いと思います。

大田 鞠智城国営公園化にむけて、最後に先生から一言いただけますか。

小田 国指定史跡になり、大野城や基肆城と同じ特別史跡になってしかるべきだと思います。そのためには、やはり歴史的な裏打ちが必要で、七二棟の建物跡があるが、変遷はどうなっているのか。記録として、その後、平安時代に「カラスが屋根を突つついた」と記述がある。それまでの百年間が空白で、その間のこ

とが少しでも分かれれば、鞠智城の歴史を組み立てることができ、大宰府と近い建物であると示せます。

もう一つに、鞠智城の独自性、例えば、平地性の城で広域説をとる事など、他にはない特色を出していくなどの工夫は必要であると思います。

大田

ありがとうございました。

平成21年度第5回館長講座

(平成21年10月11日開催)

『文献からみた鞠智城』

【対談】

坂上 康俊 (九州大学大学院教授)

大田 幸博 (熊本県立装飾古墳館 館長)

大田幸博

もう早くも十月になりました、どんどん月日が経っていくわけですから、今日も九州大学の大学院の方から坂上先生をお迎えいたしました。非常にお忙しい先生で、やっと講座にお招きしましたけれども、先般、先生の研究室に行きましたところ、部屋の中が本だらけでありまして、凄まじく本がありまして、本の中にいるような感じでビックリいたしました。お話をうかがう前に、先生の方で専攻されています古代史、先生にとりまして古代史の魅力とか、そういう方面に進まれました経緯を少しお話したいと思えます。どういふところで古代史に惹かれたか。

坂上康俊

そういうところから攻められるとは思わなかった。僕は、進路を決める時に、古代史にするか考古にするかというの、やっぱり迷いました。古代史にするか、近代史にするかも迷いましたね。少ない資料でカチンとした論評ができて、しかも何か世界のことを考えられると申しますか、そういうところがあって、結局、文献、古代史を選んだという事でしょうかね。天下国家を割と論じやす

いという、近代史ですと膨大な資料と格闘しなければいけませんけれど、古代史はその辺が手頃だということはいえます。

あまり安易にする事であってはいけないのですが、イメージがわかりやすかったという事があります。考古学の方は、ちよつと私はもう、SB1005とか、何とか形式だとかそういうのは覚えられないだろうと思いましたが、あきらめてしまいました。

大田

今日、先生からお話しいただいて、非常に私嬉しかったです。金田城というよなものが築城記事しかないというのが、今日私たちとしましてはビックリしたような感じなんです。鞠智城は意外と文献があるんだ、というな感じでございますけれども、大野城は特別史跡ですけど、鞠智城もそのような位置付けがいいのでしょうか。

坂上

目的は違ったかも知れないけど、使われ続けたということになると思います。

金田城は築城の記述があつて、現在発掘調査をやつて八世紀初期くらいの遺物しか出ない、つまり実際はほとんど使われずに終わった。それも土器とか八世紀初期までの遺物しか残つてないので、早い段階でほとんど放棄されていた事だろうと思います。

その点、大野城と鞠智城は、大野城はずっと大宰府の城山として逃げ城といえますか、朝鮮式と申しますか、百済とか新羅の城と同じように政庁と城とセツトで残つて結構資料がある。鞠智城はその点、そういう訳ではないけど、私の想像では、官庁的に使われた、肥後の国の菊池郡のお役所の機能をもたせていった結果、維持されて残つたと。資料にも出る、そういう事ではないかと、それぞれ山城ごとに、運命と申しますか資料の残り方が違うということだと思えます。

大田

今おっしゃった鞠智城の官庁的性格とか役所の機能とかによつて長らく存続してきた考え方について、そこに、築城の目的が、今日お話いただきましたけど

単に仮想敵国に対する対応というものの、プラス隼人対策といいますが、そういうことでもありますけど、距離的な問題、築城の場所の問題、築城の意義というものにも繋がってくるとの解釈で良いのでしょうか。

坂上

そのあたりは非常に難しく、やはり現在考えられるのは、肥後国の国府とは、少し離れすぎていますので、国府とセットで造られたとは考えにくい。もちろん七世紀後半の段階で肥後の国の中心をどこにするかというやっかいな問題があったと思いますが、三野や稲積みたいな関係は考えにくいので、ただ戦略的には重要なところだといろんな意見を聞いて何故ここを選ばれたのか、色々な説を出して論議することが鞠智城を知らしめる方法ではないかと思って、大きな声で議論しなければ、いつまでもくすぶっていてもしょうがないという感じはいたします。

大田

軍団の話というのは、肥後は益城軍団が有名なんですけど、佐賀大学名誉教授

の日野先生もおっしゃってましたが、軍団と鞠智城の関わり合いというか、板楠先生もそういった話をされましたけど、坂上先生なりの軍団と鞠智城というものが先程、役所の機関という言葉に置き換えられましたけど、お考えをお聞きしたいのですが。

坂上

軍団というのは、基本的には、肥後国の管轄外にありまして、郡司（ぐんじ）、郡（こおり）（国の地方区画）と直結しないのです。最初に兵が置かれた時には兵に一つ位の軍団の前身みたいなものが置かれたけど、兵が軍に分轄された結果、必ずしも郡ごとには置かなくなっただけというイメージは持っています。全国一律にそうだったかどうかわかりませんが。

鞠智城には官庁機能、そして兵庫とかある訳ですから、そこになんらかの形で順を作って何十人とか何百人ずつとか詰める兵士が必要な訳で、一つの軍団だけではなく、いくつかの軍団が廻り順で鞠智城の警備兵みたいな形で、平時はそういう形をとっていたのではないかと。もし近いところに格好の軍団があ

れば別ですけど。東北地方の場合でも周りの国から兵士を廻してますので、それと同じような事が鞠智城でも行われた可能性がある。特定の軍団との結びつきがあったのか、それとも肥後国のいくつかの軍団から連れて廻されていたのかどちらかは今のところわかりません。

同じようなことが大野城でもいえると思います。筑前でもいくつかの軍団が順を作ってそこに常に常に兵士を派遣していたと、そういう状態で考えていいと思いますので、鞠智城の場合も同じように考えるのが自然ではないかと思えます。

大田

次に、防人の存在というものが岡山市教育委員会の仲間が言うには、二千人から三千人足らずの人数であると、その人たちが守りに散って行った場合にエリアごとの数というのはいした数ではないだろうと。そこには軍隊と呼べるものではなくて、警察的な役目ではないかと話したことがあるのですが、鞠智城には来なかつたんじゃないかというのも含めて、先生なりの防人像をお聞かせ願えれば。

九州より本土には軍団兵士はいる訳です。国府とか大野城とか、大宰府については軍団兵士が警備する。警察的な機能というのは、軍団兵士のところで、現地の人間の方でそれは十分に行う、もちろん軍団兵士制が農民の疲弊とかそういうもので奈良時代の末には無くなりまして、いろいろ変遷をしますけれども基本的には警備のようなことは軍団兵士が担当していたというのが普通だと思います。

ですから、それ以外に防人が東国からわざわざ連れてこられる訳ですから、それは普通の警備ではなく、まさに「崎を守る」、もちろん見張りが一番で、対馬の北のほうから次々に烽火をあげる担当者がいて、対馬から壱岐、唐津、大宰府までの連絡を担当するのが一番重要だと思えます。二千人以上いるわけで、それが壱岐と対馬が主に、あと筑前の北の玄界灘沿岸ということになります。対馬は米が取れませんかから食糧が大変で、陸地からその分だけ運んだりする訳ですけれども、そこまでして維持する訳ですが、五百人位は、またはそれ以上、行っていたのではないかと、私の勘ですけど。二千人のうち、それ位は

対馬と壱岐にそれぞれ行ったのではないか、おそらく三百人から五百人位は対馬にいたと。そうすると烽が三つ、四つ位はあったのではないかと思えます。実際には九世紀の末に、対馬の城主が郡司に襲われて殺害され、防人も十何人か巻き添えを受け殺されていますので、殺された人数はそれぐらいですが、実際、警備の人数は数倍いたというイメージです。

大田

元寇の役の際に、文永の役で推定戦闘員が二万人、非戦闘員入れると三万人は来ると。弘安の役では十四万人来て、先程おっしゃった五百人位では対馬は絶対守れないと思うのですが、古代の兵力はどのくらいあるんですか。

坂上

そこはわかりませんが、千人くらいの捕虜をこちらに送還しに来たといわれていますので、その時にも船の上には二千くらい居たのではないかと思えますが、それくらいは平気でやってくるでしょう。逆に新羅を征討しようという時には数万人規模の人間を集めようとしたと。ただし、その中には戦闘員よりも

水夫（かこ）、こぎ手がかなり必要なので人数を・・・、あまり意味が無いか

もしれません。本気で向こうが攻めてこようとすれば、もちろん防人では足りないのは当然だと思います。ただそれを烽火で知らせるとか、早船等そういう形でやってくるわけで、それを考えれば、いたほうが安全、こちら側の備えとして良いといえると思います。

大田

九世紀後半、鞠智城のあり方の中で奇怪現象といいますが、なぜか鼓が鳴ったりして不吉な前兆ということ、軍事的な予兆と新羅との関連ということ、非常に興味深い話ですので、もうちょっと補足的なものがありましたらお願いします。

坂上

不動倉が焼けるというのは、中身は空だったのかもしれないというのがあって、八世紀末に東国の方、関東地方では盛んに不動倉とか、倉が焼けているんですね。これは国司同士かあるいは国司と郡司がグルなのか、相手を陥れ

るためなのか、そういう争いの中でわざと焼いて証拠をもみ消すとか、あるいは他人のせいにして管理責任を問うとか、いわゆる神の火災、最初は神火といって神が焼いたということで『続日本紀』とかに出ています。

それからは離れて九世紀末、あの不動倉の火というのは、そういう国司と郡司、または郡司同士の陰謀で焼けたのかもしれない。原因を問い始めるとわからないとあります。

兵庫の鼓が鳴る、という事件は私も調べて見て結構あるなと思っていましたけれども、『文徳実録』とか『三代実録』、特に『三代実録』は、割と地方の行政上の問題とか事件など丁寧に拾ってくれて、かなりボリュウムのある歴史書です。その頃の社会の様子がわりと判りやすい仕組みになっています。『六国史』が終わりましたして、政府が集めていた情報というのが我々の元に無い状態になってしまいましたので、本当に九世紀後半にいろいろ怪事件が集中しているようにみえますが、実際には十世紀、十一世紀にも色々なところで怪異は起こっています。数としては九世紀に多いということは無いと思います。我々の元に

『六国史』が無くなりましたので九世紀が目出つとそういう事であろうと思います。

そういうわけで、律令体制の崩壊とか、そういうものと怪異現象を結びつけるのは短絡的かなという事で、むしろ当時の政府がそういうものを丹念に残して、占いまでさせているというのは、何らかの予兆を読み取りたい、そういう意図であり、東国の蝦夷関係が沢山あるのと、西のほうでは多分、新羅、それ以外はその時点で考えにくいものですから、新羅が仮想敵としては中心だろう思っています。

大田

時代的な背景の中でいろんな要素があつて報告を丹念にしなければならぬというか、そういう意識構造があつたんでしようか、全て報告したほうが良いという風潮があつたんでしようか。

坂上

役人というのは皆同じで、後で責任を背負わされないように予兆があつたら、

予兆らしきものがあつたら報告するというのは義務というか、自分の首の問題ですから大事なのです。もう一つ複雑なところがあつて、現地で判断されても困るのです。勝手に動かされても困るので、中央政府としては、占いは自分のところで一括してやりたいのです。報告させて、その結果をしかるべきところに伝えて、不吉なことは避けるようにということです。そういう意味で現場は単なるパイプの先端みたいに考えて、むしろそれ以上に動かれては困るといふ面もありまして、それで逆に、しっかりと事実を報告するといふ趣旨で督励している、そういうふう考えたほうがいいと思います。

大田

プリントを拝見しまして、三野城と稻積城、二つの城が南九州というのは、考古学の者からすると、北じゃないかと思うのですが、先生の古代史文献からいくと隼人対策からして南にあつてもおかしくない、という考えでしょうか。

坂上

隼人対策というよりは、地名で稻積郷と三納郷というのは両方、大隅国府、日

向国府のそばにある郷名として残っているという、偶然にしてはそれだけのセットで国府のそば、そして郷名、そういう点から南側の可能性もかなり配慮すべきだと申し上げているだけで、北側だと候補地が三野の方は怪しいなど。

もちろん南側も山城の跡すらわからないわけです。あくまでも基肆城とか大野城と同じような朝鮮式山城を探そうとするから見つからないのであって、東国の城柵なんて土の中から出てきたわけなので、政治的な中心ですから、そんな山城ってわけじゃないので。そうすると今まで見つからないのはある意味当然かと。山城じゃないので、そういうふう to 考えれば南側に見つかっていないのは当然かなという気がします。

大田

鞠智城も立地条件が違うので、昭和四十二年に初めて礎石が出てきて、場所が特定できるようになったわけですから、あまり型にはめて考えるから分らない部分もあると思います。私たち、矢野君と西日本地方の古代山城を巡りましたが、全部条件が違いますから、神龍石なんかも、「ええっ？」という所にあ

りますから。先生、三頁の防人の行動について、もう少し補足願いたいのですが。

坂上

防人については真中辺り八百人とか九五三人とか、これが防人自身の移動の記録です。防人を連れて行く部領使というのは、引率者という意味であり、おそらく送って行って船に乗っていますから帰ってくるまでの記事。ですから真中の防人達は陸上を歩いて行かされたのではないでしょう。か、通過する際の食糧だと思えるのですが、普通は防人が赴任するときは船で行くのですが、陸なのか水路なのか自信がありません。

大田

このようにして引率者がいて団体行動をやっていたという事で、どういうふうに行ったかと。周りは短絡的に大阪から船で来たというのですが、もうちょっとわかると助かりますね。

坂上

これは全部帰るときの記録で、停止指令で帰るときのですから、実際は難波まで来た人たちから大伴家持が防人歌を採取しているので、そこで一旦、東国の防人達は船に乗せられた。連れて行かれるその過程はなかなか資料がない。たまたま天平一〇（七三八）年の正税帳が停止指令の実例でわかるということなのですね。

大田

大伴家持が『万葉集』の防人の歌を採取しているといいますが、防人というのは歌を詠めるようなレベルの人が多かったのですか。

坂上

歌ですから、それは個人の『万葉集』の歌全般についていえると思います。家持とか、そのレベルの人だったら知れませんが、ある意味では、儀礼的なものであったり、あるいは民謡的なものであったりというふうに考えれば、防人達も自分の感情をその場で歌に詠んだのではなくて、故郷で語り伝えられていた昔の防人達の送った歌とかそういうものを覚えていたとか、その場でたちどこ

ろに読むというより、そういうものと考えないほうがいいのではないかと。

大田

私たちは、これは家持が作ったのではないかと、そういうふうに言っていました。だが、そうではないんですね。

坂上

ある程度は東国の表現というものが入っていれば、それは家持が作ったにしては出来すぎかなと。そのへんは専門ではないのでわかりませんが、もちろん家持が手を入れたということは、十分考えられると思いますが、それだったら元はあつただろうと考えられると思います。

大田

最後に、一つ先生にお伺いしたいのですが、昨年の十月に仏像が出土しまして、百済で造った仏像ではないかという事になっております。非常に気分が盛り上がったんですが、『日本書紀』に基肆城とか大野城については、百済人が古代山城の築城に際しては技術指導したというふうにいわれており、鞠智城もそう

ではないか、補完的な資料になるのではといわれていますが、先生の古代史の立場として百済仏が出てきたという事の感想を一言お願いします。

坂上

おっしゃる通りだと思います。その前に木簡で「秦人」と、いわゆる渡来系と申しますか、そういう物が出てきたと。時期的にも七世紀とかの百済仏が出てきたという事は、当然それを拝む人達が念持仏にしていた様な人達がいたわけで、ここは、寺院ではありませんから、それは工事関係の人が持ち込んできたと考えるのが自然だと思います。『日本書紀』には見えませんが、百済系の技術者が運んできたものがこっちで発見されたと考えるのが自然かと思えます。あとは個別に考古学的な遺構でもって百済的なもの、新羅的なもの、あるいは朝鮮的なものという事で、これは朝鮮の技術が入ってきたというふうに固めていけばいい話だと思っています。ある程度それは出来ると思います。

大田

最後に、先生に締めとしてお伺いしたいのですが、先生にとりまして、鞠智城

の全体像といいますが、古代史の中のイメージといいますが、それをお伺いしたいと思いますが。

坂上

やはり、謎なのです。イメージが固まらないからおもしろいので、謎だとも
ちろん山城で戦闘用のものでありますけど、それが、必ずしもそれだけではな
く、九世紀まで生き延びている。あるいは、もつと後までかも知れませんが、
その中に律令国家の歩みと鞠智城の歩みが平行関係と申しますか、そういうよ
うなものが見えて、他の山城ではこういう物件はないものですから、非常に興
味深い、文献資料としてはそういう事がいえると思います。

大田

どうもありがとうございました。



この電子書籍は、歴史公園鞠智城・温故創生館館長講座資料集 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：歴史公園鞠智城・温故創生館館長講座資料集

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2024 年 7 月 20 日